問答を聞きて今井兼女が在外革命黨連類の嫌疑を以て牢に入られたるを知れり牢屋とは意外より面會を求むる事思ひも寄らねば余は痛く失望せり栗角も同樣の失望にて翌日の晝頃ここで頻に何か考ふる樣子なりしが彼れ中々の頑物なり食事の時巡査が旅行券を檢めに來りしを幸ひ彼は旅行券を所持せずと云ひ巧に牢屋へ送られたり余は急ては事を仕損るの誡を守り猶ほ悠々閑々と攜へ居たるに自稱士官梶田も何か氣に掛る事ある如く頻りに出つ入つするを見たり余は猶ほ彼れが本性を見破得ず必條其筋の探偵なるべく又栗角と仲の惡き者あらんとは兼てより見破りたれど猶ほ合點行かぬ所多し日の暮に及びて彼れの所へ一人の來客あり其風体を見れば無論公證人か代言人と察せらる彼れ余の輩なるを知れど猶ほ万一の間違ありては成らすと大事の上に大事を取し如く其客を別室に連行きて何事をか半時間ほど話して分れたり余は直に宿の主人に逢ひ今の客人は誰ぞと問ひたるに彼れは有名なる金滿中佐の財産を監督する公證人なりと答へたりア、益々怪むべし軍馬買出



の爲と云へる自稱士官梶田が何故に金滿中佐の遺産監理人と密談するや是も亦栗角と同じく或は其遺産に目を附る奴にはあらぬか余は疑はしさに堪へざれば翌日君が家の下僕を勤たりと云ふ百性某を連れ來り竊に自稱士官の顏を見せしめたるに驚くべし自稱士官とは其實君の從兄なり君の敵あり憎むべき鳥村槇四郎なり讀めたり〳〵彼れも良に栗角と同じく君の財産を奪んとする者あり察するに今までも彼れと栗角とは同じ財産を目當にして同じ場所を漁り居たるに相違なし夫が爲めに互ひに顏に見覺ありて互に疑ひ居たるならん嗟余は遂に彼れの本性を知たり愉快〳〵是よりして一層鋭く彼れが擧動を探るに彼れ中々に通傳の廣き男にて地方廳へも出頭し殊には日々牢屋へ出張するの許可を得たる樣子あり何故に彼れは斯く牢屋に出張するぞ今井兼女に逢ふ爲なるゝ云ふ迄もなし彼れも栗角も既に兼女に逢ふ丈の道を開きたるに余一人其道を得ざるは殘念なり去れど唯安心なるは彼れと栗角と一時に兼女に逢ひ左右より説立れば兼女は兩方を疑ひて兩方を退くる事必

定あり兩方とも手を引きたる後にて余一人進み行かば必ず余の勝利あらん依て余は鳥村槇四郎が歸り來る度に其顔色を察するに毎もく失望の体あり余は先づ彼れが心中此虫とあらん爲め充分に機嫌を取り唯氣に入れんとのみ勤め居たるに一週間の後は彼れ余を以て羊の如く猫の如く音あしき者と思ひ此上あき相手と思ひ友達とし下僕とし殆ど相談對手ともする程にあれり此向ならば彼より口を開き町川君實は是々だが何うしたら好だらう」と問ふに至るべ近々の中あらんと余心待に待居たるに果せる哉果せる哉「實は町川君或女が或陸軍士官の遺言書を持て居るか居ないか探る爲め毎日其女に逢ふけれど其女頑固にして余を疑がひ今以て實を明さず足下の顔は極めて正直にして一目に信用せらるゝ質あれば足下あら必ず其女に白狀せしめ得ん余に代りて其女に逢ひ氣永く實否を聞き呉れよ其女實は今牢屋に在り牢屋へ自由自在に入込むべき鑑札を與ふる程に」とて終に余に打明け且事成らば斯々の褒美を與へんと迄言出したり柳條君よ待ば海路の日和余い實に氣永く待た



る甲斐に今い兼女に逢ふ道を得たり而も敵より其道を與へられたり余は信切氣に引受つ三日續けて牢屋に行きたるが初の日も次の日も深き話しをせず三日目となり彼の兼女が手から彫たる十字の痕ある飾物を示し角三が事槇四郎が事三方爭ひの事君が目下の身の上の事を詳しく話すに兼女は全たく余を信じ腹藏なく委細を打明けたり其言葉に由れば意外の事甚だ多し柳條君氣を落着けて能く聞き給へ金滿中佐は露國の病院にて死したり其死亡證書は病院長に手紙を遣れば直に送り呉れる事中佐い一切の財産を君に讓るとて其旨を遺言書に認め兼女に托し兼女無事に持歸りたる事是までは先無事なれど茲に一つ合點の行かぬは兼女當地に歸りてより直に君に宛其旨を認めて手紙を送れり然るに其手紙の未だ着ざる中(即ち手紙を出せし翌日)に君より兼女へ宛手紙來り「直に其遺言書を持て巴里へ來れ」との旨を言越したりと云ふ此手紙は誰かゞ君の名を騙り兼女を誘き寄せんとて出せしに相違なけれど扨其出せし人は何者ぞ余の考へにてい必ず鳥村槇四郎ならん槇四郎は當地

の公證人より兼女の歸りしを聞き早速兼女を誘き寄せんとしたるなり夫れにしても最初兼女の出せし手紙が君に着かざりしゝ何故ぞ是は何かの間違にて彼の栗角の手に入しならん左すれば今迄の間違は全く栗角と鳥槇の仕業なり然るに又一つの大間違ありて女ゝ右の鳥槇の手紙を無論君よりの手紙と思ひ我が疑のお梅と云へる者に其遺言書を持せ直に巴里へ上したりと云ふ扨此お梅と云へるゝ幼き頃君を知れる由にて氣丈の女なる上殊に續書さへ達者なれば兼女の手紙も實ゝ此お梅が認め君よりの手紙(實ゝ鳥槇の手紙)も此お梅が讀みたり且又鳥槇の手紙には巴里の何町何番地へ尋來よと明細に記しありしかども兼女は其町名番地を忘れたりとの事其町名番地を知るゝお梅と鳥槇の外にあし然るに鳥槇が今斯くペリゴーへ尋ね來る所を見れば彼れ猶ほお梅に逢ぬ事必然なりお梅其番地を忘れて尋ね行かざるか夫とも途中にて鳥槇の仕業なるを悟り故と尋ね行ずして今猶君の居所を尋ね居るか孰れにしろお梅ゝ今猶ほ巴里に在り大事の遺言書も全く此お梅の手に在る事なれば是より巴里中を尋ねてお梅を探し出すが肝腎なりお梅を探し出せば遺言書は直に手に入らん依て余は直に巴里へ歸り行く委細は面會に譲る



栗角も牢を出來れり去れど彼れ何事をも聞出し得さりしと見に最失望の体なり鳥槇も余が兼女は何事も言ずと傳へし故同じく失望して歸らんとす先づ第一等の結果を得たるゝ余なり柳條君よ余ゝ巴里に歸り行き草を分てもお梅の在家を尋ねん

柳條健兒殿　　ペリゴーにて

町、　友

## ●第四十回

斯く町川がペリゴーにて樣々に働ける其留守にて柳條健兒は堅く町川の言葉を守り其家の二階に籠りしまゝ外出もせず今ゝ身体も常に復し散歩

運動など差支なき程に至りしかど瀬浪孃と其父榮三とが毎日日の暮より尋ね來り懇話に夜を更すを散歩運動に彌優る樂みとはなせり榮三も瀬浪孃も初て柳條が歇脾室の一條より決闘の始末を聞し時は痛く打驚きしかど過し事とて咎めもせず唯彼馬平侯爵より預りし大金を返す期限(九月十一日)の次第に近くより榮三い夫を患ひ初の中は彼是心配の色を現せしかど果は全く斷念し其時こそは銀行の財産洗ひ浚ひ差出して義務を盡し再び昔時の貧窮に歸んのみと思榮の臍を固めし如く心配氣ある顏もせず金子の金の字も言出さず柳條い返ッて之を氣の毒に思ひ今にも町川の働きにて今井兼女の事婚明かば叔父の身代我物となる故銀行の事患るに足らずと慰むれど榮三いイヤとよ我身代さへ當にあらぬ世なれば叔父の身代い手に入るまで當にせぬあろ確なれと答へ然らばペリコーに殘しある地面を賣んと云へば地面は萬一零落し時命を繋ぐ資本なれば賣急ぎせぬが好しとて話を外の事に紛らす故柳條い何とかして一日も早く町川より吉左右を聞き榮三の心を休めんと夫のみを思へども生憎町川よりの第一回



の通信着きたるのみにて其後い何の便りもなし斯て幾日をも空く過せしが或日の事榮三い毎より不機嫌の顏色にて入來りしかば柳條怪みて其故を推問ふ初めは默して言ざりしも終に隱し兼實は今日馬平侯爵の母君と聞にたる老婦人が尋ね來り瀬浪を息子の妻に呉れとて婚禮の事を言出せしかば充分に斷りたれど斯く貴族の跋扈するを見るに附け日頃の憎しみ浮び來り今猶ほ忌わしきに堪へずとて最慷慨の語を吐きて止まず柳條も兼て貴族を憎むが上殊に我物と定りたる瀬浪孃を妻にせんと云ふ其無禮なる振舞を憤りしも唯富貴に眼を眩さぬ榮三の潔白ある心に感じ且い傍に在る瀬浪孃が顏に充分馬平侯爵を嫌ふの色を現せしかば柳條は全く安心し孃と共々に榮三を慰めつ後は例もに更るなく雜話よ夜を更して分れたり翌夜も亦榮三は尋ね來りしが此夜も同じく不機嫌の色見えしかば柳條は差寄て「又馬平侯爵が尋ねた譯でいありますまひチ」と笑ひあがら打問ふに榮三は最眞面目よなり「イヤ笑談事ていない」と云ひつゝ傍なる瀬浪を後目に掛れば孃は其意を悟りてか其儘次の間に退きたり後よ榮三は壁

を潜め「外でもないが實は其筋で秘密黨の詮議が痛く嚴しうて(柳)ニ秘密黨の(榮)イヤ隱すには及ばぬお前や此家の主人町川が兼て秘密革命黨に加ッて居る事ハ私も能知て居る(柳)でも其黨ハ解散して(榮)イヤ解散しても其筋では爾は認めぬ既ニ今日舊秘密黨員で一人捕縛されたと云ふ噂お前も町川も事ニ寄ると睨まれて居るかも知れぬ私は夫が氣ニ掛るから遣て來たがお前は至急に引越給へ至急に—(柳)夫ハ引越も仕ませうが—(榮)引越ても私と嬢とは毎日尋ねて行タから(柳)ナニ嬢さへイヤ貴方さへ尋ねて來て下されば何も此家には限りませんから何所へでも引移ります(榮)最う嬢とも相談を極て來たが何でも町盡れの靜か所が—餘り其筋の目を附けぬ所が好からう(柳)何所ても私しは同じ事です(榮)夫では斯し給へ明朝食後に此家を出て何所でも氣に入た所があれば直に夫を借り最う此家へは歸らずに直ちに其所を住居と定め私の所へ郵便で知せて寄越せば(柳)ハイ爾しませう」是にて相談極り此夜は兼三も分れ歸りしが柳條ハ翌朝食事を濟せ約束の如く此家を立出たれど扨何を目當に我が行先



を定むべき町盡れとて廣き事なり巴里の周圍ハ皆町盡れなれば何の方角ニ向ハんかと思案も未だ定らぬうち足は平生歩み慣れし門苦取の方へ早や岡の眞近まで進み行きたり茲ニ來らば直に思ひ出すは彼の恐しき穴の事なり穴の中に國事探償老狐的を生埋にせし一事なり既に二ケ月ほど過し事とは云へ柳條は思ひ出して慄としたるが恐しき物は見度き譬へ彼穴今は如何になりしぞ其入口は道行く人の目にハ觸れぬが夜見るとは又幾分の違ひあらんなど思ふに連れて益々見度くなり岡の麓に添ひ徐々と歩むうち早や入口眞近ニ進みたり見れば草茫々と生茂り孰れを穴ぞとも見分難き程なれど唯怪むべきは此頃何者か草を推分け其穴に這入しと見ハ穴の口まで一筋の痕を留めたり柳條ハ餘りの怪さに目を見開きしが此時穴の中より竊々と出來る男あり年は三十四五なるべく背高くして肉瘠たりと見ゆれど柳條が未其顏に見覺えする暇あき中其男は早く柳條の姿を見て横手の草中に伏隱れんとし今更隱るゝも其甲斐なしと心附てか又も周章まく一方に向き町の方へと歩み去る樣子ニ此男抑も

何者ぞ其筋の探偵あて此穴の中を探らんとせし者か夫とも柳條と同じく秘密黨の一員あるか此二ゑ非れば茲ゑ穴あるを知る筈なく草推分て入る筈なし孰れにしても怪むべき奴と思へは柳條ゐ足を返し其男の後を附け行くゑ彼ゐ往來を右左に折曲り但有る横町に入りて其中ほどなる最靜なる家の戸を開き姿は戸の中に隱れたり此町の名ゐ何と云ふゑやと傍の表札を見れば湖南街とあり湖南街とは聞し名なりと又も足を進め今彼れが隱れたる家の前ゑ至れば入口の戸を開けたる儘なり「フム彼奴め事に由ると已を此家ゑ誘き込む積で故と戸を開放して置たかも知れぬと細語きしは感心の思附なれど實は彼の男ー内より柳條の仕打を窺かん爲め斯く開き置きしとは柳條猶ほ悟り得ず「爾だ此中へ蹈込むのは險呑だ」と呟きあが ら其門札を眺むれば十三番地とありアー湖南街十三番地此番地を見て柳條ゐ忽ち思ひ出せり先に我黨員の長谷川何某等が蹈込て彼の老白狐を捕へしも確ゑ湖南街十三番地なりしと聞けり此家は即ち活埋にせられたる老白狐の住居ありしか左すれば今の男も唯者にゐ豈もあらじ



## ●第四十一回

老白狐を活埋にせし彼の穴より出來りて元老白狐が住みたる家に入る此男果して何者なるや柳條は怪さに堪ざれど此上探るべき手段なし何でも老白狐と一樣の國事探偵にもやあらんと斯思へば柳條は急に我身の危さを知りし如く茲に狐疑せんよりは引越す先に見出すが肝賢あり此所わ立去りて何所か貸室の看板は無きかと右左眺めあがら一直線に半町ほど進むとし折しも遙背後に當りて騒がしき音の聞ゆるにぞ振向見れば數多の騎兵一個の立派ある馬車に從ひ驀地に此方へ駈來る其音なり是れ問ふ迄もなく國王の巡回と知らる遑過さんと道を避けて待り中に騎兵の一群は國王の駕と共に矢を射る如く馳去りたり其後より唯一騎後れ馳に驅來る近衛士官ゐ馴さぬ荒馬に乘したため意の如く進み得ぬ者と見ゆ馬の逸るを抑へんと樣々に術を盡せど抑ゆれば益々揚り矯れば愈々逸す流石の士官も殆んぞ持餘したる樣子なり柳條は見るともなく其顏を見上れば是なん冒

て榮三の家にて逢し事ある我戀の敵馬平侯爵あり憎き顏と思へば今猶ほ忘れもせず侯爵も同じく柳條の顏を見て今猶ほ覺に居る如くハッと驚く樣子見ゐしが其襟みに手元狂ひ馬は忽ち荒猛り奔雷の勢ひにて驅出すと見る間もなく向手なる橋の袂に躓きて横樣に仆るれば侯爵は鞍より投出され眞逆樣に大地に落たり下は石もて甃詰し所なれば侯爵は餘程の怪我を受しならん早や前額より血潮の流るゝを見る柳條は之を見て氣味好しと思ひしも少しの間にて直に天然の本心現れ來り敵ながらも知ぬ顏にも見過し難しと磁々其傍に進み寄り手を翻て抱起すアヽ世に是ほど迷惑なる事はあらじ迷惑でも詮方なし通り合せしが不運と斷念め我膝に引上れば全く氣絶せし者なり若し此所を巡査にでも見附られ飛だ疑ひでも受てはと空しく邊を見廻せど我爲に通人となるべき人はなし誰か來て呉れぬかと立上れば此時忽ち我背後に聲あり「貴方其怪我人を捨て行てゐ了ません」と云ふ「ナニ捨ゐ仕ませんと云ひつゝ振向見れば見も知らぬ男なれど何とやら先程彼の穴より出湖南街十三番地に入たる男に似たり其男の顏



も見ず又其時とは衣類も違へど背恰好は其儘なり彼れ若し家の内にて我立去る所を覗き居て此有樣を見し爲に直樣着物を着替て飛來りしにはあらぬかと思ふ樣な心地すれど確と夫とも言難けれど徒らに其男の顏を見詰るに其男欽き聲にて「貴方私ーの顏ばかり見て居ても仕方がありますまひ」と云ふ柳條は據所なく爾ですがー(其男)爾ですかではない早く馬車へ乘せて此士官の屋敷まで届けやうではありませんか其積で私しは馬車まで呼で來ました見れば成るほど何時の間にか馬車もあり手廻も好き男ある哉柳條ゐ呆れて物も言れず(男)此方は貴方の知人ですか(柳)イヱ全く知ぬ人で(男)知ぬ人なら手帳を見れば分ませうと早や侯爵の衣嚢を探る其素捷しき事其道に慣たる葬儀師の手代に非ずは必ず第一等の探偵あらん柳條は海氣味悪く程好く外して身を避るに如ずと思ひ「貴方が馬車まで屋ふて下さッたは何よりの幸です馬車賃は私しが拂ひますから後の始末を貴方に願ひます」と逃仕度の口上を彼は中々承知せず「イヤ爾は了ません(柳)てゞ私しは急の用がありますので(男)私しも用がありますゆ互に

不運と斷念める外はありませんナニも貴方が馬から突落した譯ではなく馬が躓いて獨り落た事は私しが證人ですから貴方い恐れる事いありません私しと一緒に行きませう若し私し一人になれば疑はれた時私しが何と言開が出來ませう」と道理ある言葉に負きもならず其中に彼れ早や侯爵の衣囊より數枚の手札を取出し分りました馬平侯爵です早速二人で送りませうと云ひつゝ立上りて馬車を呼び「サア此怪我人を載て呉れ」と云ふに馭者は逡巡して「イヤ先ア お斷り申ます唯の人あら載ますが怪我をした士官でい先日も痛い目に逢ました馬車の中を血だらけにされた上其筋から疑はれ何でも馬車の中で人殺があつたに違ひないとて一週間も調られました」と怪き馭者の言分に柳條は若やと思ひ其馭者の顔を眺むれば薄々と見覺えあり先の夜獨逸士官と決鬪せし其馬車の馭者ありけり馭者も怪げに柳條の顔を眺むるに似たり件の男は斯くと知らねば「ナニ其樣な事があるか巡査が咎めれば已が何とても言譯して遣る」と無理に馭者を說伏せ馬平侯爵の身体を馬車に積み柳條に向ひて「サア一緒に乘ませう」と云ふ柳



條は殆んど針の山に上る如き心地すれど去りとて逃るゝ道もなし止む事を得ず共に乘りたり抑も此男は何者ぞ

## ●第四十二回

柳條は厭々ながらも詮方なく馬車に乘れり怪我人は我慰の敵馭者は先夜の恐しき決鬪の關係者なり對人は探偵らしき怪しの男宛がら針の莚に座す想し無言の儘に進むうち怪我人は目を開きぬ開きて柳條の顔を見るよりも痛く驚きし樣子にて「ヤ貴方よ我敵に一介抱され」と云ひしのみにて又目を閉ぢたり探偵らしき彼の男は隙さず柳條の顔を見詰て「貴方い此方を知らぬと云たけれど此樣子では滿更知ぬでもないやうですチ」柳條は忌いしさに琵されど何氣なき顏を作りて「ナニ知ますものか(男)でも貴方を我が敵と云ひましたぜ敵と云ふには餘程深い因緣が無くてい(柳)でも私しい知ません多分頭を打て腦髓が狂ッたから此樣な事を云ふのでせう」彼の男いゼヽラ笑ひ先ア其樣な事に仕て置きませう」と云へり何所まで憎きか

庭の知れぬ男あり其中に早や馬車は侯爵の家の門に着きたり彼の男は早くも飛降て門番を呼び事の次第を手短く說明すに門番は驚きて内に入り大勢の下僕を呼來り前後不覺の侯爵を家の内へと抱入れたれば柳條はホッと息し今の間に早く歸り馬車賃を拂ひて立去んと衣嚢の中を探るうち件の男ゝ早や來りて馬車に飛乘り貴方は用事があると仰有ッたが何所まで行くのです(柳)何所までいも好い是て分れませう(男)イエ爾は丁ません若し此事で警察へても呼出されれば互に口の合ふ樣に今茲で打合せて置ればエ貴方全体何方れ方角へ行くのです柳條は少しまおつきし末彼方の方へ」とヂョアン街の方に指させば「夫は幸です私しも彼方の方に用事があるから一緒に此馬車て行ませう」と云ひながら隙さず馭者に差圖すれば馬ゝ逸散に馳出せり柳條ゝ益々當惑し何とかして此男に分れんと夫のみに氣を揉むうち生憎にも馬車は既にヂョアン街に進み入り柳條が今朝出たる町川友助の家の邊まで來れり茲で降れば此男に我が居所を悟られん探偵に居所を知すは身の爲ならず二三町行過し其中に足場を見て飛降ん



かと思案も未だ定らぬ折から又向ふより駈來る一輛の馬車あり其馬車恰も町川の家の前にて停り我馬車と行逢たり此時其馬車より立出る人を見れば是なん旅裝束をせし町川友介なるにぞ扨は今歸りしかと柳條が驚く暇もなく友介は柳條の傍に在る彼の探偵らしき男を見て「オヤ貴方はと聲掛るに其男も亦同じく貴方はと驚きて受答ふ此男是れ町川の知人なるか柳條は怪さに堪へ兼て「町川君君は此方を知て居るか」と我知ず口を開けり(町)イヤ知て居る所か一の馬車でペリゴーまで旅行した道連だものと答ふ左すれば此男先頃の手紙に在し自稱士官梶田とやら云ふ者なるか柳條は未だ町川の第二の手紙を見ざれば彼が詳き身の上を知る由なし彼又慣々しく町川に向ひ「イヤ私の方が一日先へ歸たが茲で逢ふとゝ思ゝなんが成るほど是が貴方のお店だなシテ此方は矢張り貴方の何かですかと柳條が事を問ふ町川も失念なく「イヤ夫は店の番頭でと答へたれど彼れ果して此答を信せしや否(男)イヤ夫は不思儀だ斯して相乘したも御縁だらうが今日も少々用事があるから重ねて緩々伺ひませう」と云ひ終りて柳條を茲

に御し御男は其馬車に乘しまゝ孰へか急せ去れり後に柳條ハ夢を見る心地にて全体先ア何うしたと云ふのだ」と迫込で問掛る「イヤ茲では話も出來ぬ先づ一緒に來たまへとて共に二階へ上り行き町川ハ手提皮包を御しも敢ず僕の手紙を見たゞらうヲ(柳)先日一通受取たが(町)二度目のハ未着ぬか(柳)着ぬよ君から來たのは唯一通切だ(町)では手紙より當人が先へ着た爾だ手紙と僕と一緒の馬車だから今夜配達するだらう左すれば君は未今の男を知まひヲ(柳)勿論知ぬサ君の旅連だッたと今聞くが初だ(町)驚きたまうなアレは君の從兄だせ(柳)エ僕の從兄(町)爾サ從兄なり敵なりだ即ち鳥村槇四郎だ柳條ハ倒るゝ程に驚き返り「ナンダ彼れが鳥村獻では鳥村が君と一緒にペリゴーへ行たのゥ全体何の目的で(町)不思議じゃあいか栗角や僕と同じく矢張り今井兼女に逢ふ爲サ先ア其樣に驚かずと落着て聞たまへ詳しく顚末を話すから」とて町川は柳條を鎭めたり

第四十三回

町川は獄く関係を推鎮めて「僕の話より先聞く事がある君は何うして外へ出た僕が外出するなと忠告して置たのよ(柳)夫がサ非常な事件で實は昨夜上田榮三氏が早く轉居するが好らうと云ふたから家を探しに出たのだ(町)轉居とは政府で君を狙て居るとでも云ふのか(柳)爾サ既に此家へ目を附て居ると云ふ事で(町)フム若しや其お事じやないかと思ッた夫は益々大變だ何しろ萬事手早く仕遂て仕舞ねば了ぬが夫から何うした何うして今の烏村槇四郎と合乗して居た(柳)全く偶然の出來事サ」とて彼の馬平侯爵が怪我せし事より槇四郎が無理に附纏ひし事を語り(柳)僕の話い是だけだが君い彼地で何の樣な結果を得た無論今井兼女に逢いらうチ(町)緩くり逢て話をしたが遺言書は最う兼女の手には無ぜ(柳)ヤ夫やア大變だ誰かに奪はれたのか(町)奪はれはせぬ斯云ふ事實だ兼女は千辛万苦を嘗て露國から歸り直に樣子を探ッて見ると烏村槇四郎が公證人と腹を合せて金滿中佐の遺産を横領ーやうと掛ッて居る事が分ッたから兼女は直に君に宛手紙を出したと云ふ事だ(柳)ヱ僕に手紙を(町)爾サ君の居所を



知らぬから陸軍事務局へ宛柳條まで届て呉と書て置た相だ所が此手紙は君に届かぬだらう(柳)勿論届かぬ(町)左すれば道で此手紙を横取した奴がある僕の考へでは夫が必ず栗角だ栗山角三だ(柳)成ほど爾だ(町)けれどナニ栗角は恐るゝに足ぬ彼既にベリゴーにて手を燒て烏村よりも先に飛で歸ッたから先最も恐るべきは烏村だて(柳)實に恐ろしいなア人の手紙を横取して未事實る極めぬ先に直に其秘密を當人の僕へ百万法で賣附やうとする(柳)夫より末恐ろしい事がある兼女が手紙を出した翌日直に巴里から兼女へ宛手紙が來た夫には柳條健兒よりと立派に君の名を書てあつたな(柳)ヱ僕の名を夫てい誰か贋手紙を書たのだな(町)今から思へば無論贋手紙サけれども兼女い爾と知ず君から來たと嬉んで姪に讀で貰ふと中には早速叔父の遺言書を持て巴里へ上ッて來い何町何番地に待て居るからと書てある(柳)其何町何番地と云ふのは僕の番地かへ(町)無論君の番地じやないのサ贋手紙を書た曲者が自分の都合の好い所を書て遺たのだらうサけれども殘念な事にい兼女が其番地を覺えて居ない何でも

僕の考へでは是が島村槇四郎の仕業に違ひない彼奴は同腹の公證人から兼女が歸た事を聞たに依て何でも兼女が君に逢ぬうち早く遺言書を奪ッて仕舞ねばならぬと直樣君の名を騙り贋手紙を書送ッたのだ(柳)成ほど爾だらう夫から(町)夫から兼女は直樣其番地へ宛直に行くと返事を出したが能考へて見ると万一途中で島村か誰かに待伏でもされてはならぬと大事の上にも大事を取り自分の姪を寄越す事にした(ハテな姪とはお梅の事ゝ知ん(町)爾ッ〳〵其お梅サ お梅から幼い時君と互に顔も知合ッて居るし殊にハ身体も丈夫氣轉も利き自分で行くより返ッて安全だらうと其お梅に遺言書を持せ直樣巴里へ出立させた(柳)夫ハ何時の事だ(町)初て手紙を出した翌々日だ其の頃知ての通り戰爭中で政府の事務もゴテ〳〵して居たから事に寄るとお梅の方が最初の手紙より先へ巴里へ着たかも知れぬ(柳)シテ其お梅は(町)サア其お梅が遺言書を持た儘今以て音沙汰なしだ柳條ハ痛く先望の色を現しては最うお梅は佶と其遺言書を奪はれた上殺されて仕舞たのだアノ島村の野郎めに(町)イヤ爾てない島村が若し遺言書を奪ッたならナニも再びペリゴー迄兼女に逢よ行た筈があいだから僕の考へでは必ずお梅が途中で島村の奸策と氣が附き其潛地へ尋ねて行ずに氣永く君の居所を尋ねる積で何所か此巴里に隱れて居るのだ兼女の話を聞くにお梅と云ふのは男も及ばぬほど心の据ッた智慧の捷い女だと云ふから(柳)爾が成ア而見ると是からお梅を探すが肝腎だ子(町)爾サ夫だから此通り僕が歸て來たのサ(柳)けれども君に探し出す事が出來やうか(町)出來ても出來んでも探さねばならぬ唯困るのハ時日が逼ッて居のるで(柳)爾サ柴三氏が馬平侯爵に金を返す期限が九月十一日で其間に合ねば困るから(町)イヤ僕が云ふのは其時日じやあい吾々が明日にも捕縛されるか知ぬから夫で緩々探す間があいと云ふのサ見給へアノ島村の活潑に働いて居る事を彼奴め僕より幾十二時間先に立たから夜前遲く歸着たよ違ひないが夫で最う君の後を尾て居るじやないか彼奴警視總監直轄の第一等の探偵で今僕に逢てからは僕が君の爲に働いて居る事を悟ッて仕舞た決して君を僕の屋人とは思ひはせぬ今までは僕を敵の片割と

は夢にも知ずに居たけれど最何も彼も悟ッたから是からハ彼奴を敵にして働かねばならぬ彼奴必ず邪魔者を拵ふ積りで僕と君とを牢ゑ入る手段を廻らすから見給へ屹度だよだから牢に入られぬ中にお梅を見出さねば仕方がない夫ゑしても何より先に鳥村の住居を突留度が夫が分らねば誠に運動が仕憎いよ（柳）彼奴の住居ハ僕が知て居る先にソレ老白狐が捕はれた家だよ（町）湖南街十三番地かヲ（柳）爾だ（町）イヤ其な事ハない（柳）でも爾に違ひない」とて柳條は鳥村が門苫取の穴より出湖南街十三番地に入りて再び出來りしに相違なき次第を語るに町川は暫し考へフム成るほど爾かも知れぬ彼奴も國事探偵老白狐も國事探偵で互に知合て居たのみならず事に寄ると湖南街十三番地を共同の事務所にしてあつたかも知ぬ爾だ〳〵アノ家は何でも探偵の事務所らしいと誰だか爾云たよ好し〳〵是て先づ彼奴の事務所だけハ分ッたと是から探るのハお梅が何所に居るか此巴里へ着て何うしたかと云一條だ柳條ハ暫し默然と考へたる末ハテなお梅が若湖南街十三番地へ尋ねて行はせなんだか（町）ナニ其な事はな



い彼所は共同の事務室で若し尋ねて來れば同僚の老白狐に嗅附れるから鳥村ハ決して彼所へ尋ねて來いと云ふて遣る筈がない探偵と云ふ者ハ互に腹の中で擦合て何事でも隱し合ふ者だから斯く云ふ折しも〆切ある此間の入口の戸を外よりトン――トン、トンと異樣の調子に叩く者あり町川と柳條は一樣に怪みて「オヤ此叩き樣ハ吾々秘密黨の合圖だが」と同しく顏色を變じたりアヽ秘密黨の合圖を知り斯く戸を叩くは何者あるや

## 第四十四回

今井兼女の姪お梅が若し彼遺言書を持し偽鳥村槇四郎の事務所なる湖南街十三番地に尋ね行きはせざりしかとの柳條の疑ひも爾る事なから柳條も町川も此疑ひを考ふる暇なき間ゑ入口の戸を叩く秘密黨員の合圖を聞きしゆゑ町川は突と立て「惡い所へ黨員が遣て來た」と云ひながら徐と其戸を開くゑ入來るは何者ぞ是なん銀行頭取上田榮三なるゑゑ柳條の驚きい一方ならず「ヤヤ貴方が」と云ひしのみ續くべき言葉も出ず町川も同しく怕

込み「オヽ君か上田君か僕の歸ッさ事を知て來さでいあるまひチ」榮三は强て我が騷ぐ心を制しながら「何うか歸ッて居れば好いがと思ッて來さ」と云ひ終りて更に又柳條に向ひ「お前は未茲さ居さのか」（柳）イヤ約束の通り轉居する積りて家を探しさ行きましたが實さ不思儀千万な事件が起り茲へ歸ッて來た所です」とて是より有し次第を語らんとするさ町川之を推留めて「イヤ其話しは後さしたまへ上田君も何か急ぎの樣子だから先づ上田君の用事を聞こうふ」榮三は町川と柳條を七分三分に見詰めながら「外でもない我々の命が危くなッた我秘密黨を密告した奴があるので我が秘密黨とい合點行かず（柳）エ秘密黨ー（榮）イヤ怪むは尤もだが實い私も秘密黨だお前も町川と同じ黨員だ」柳條は餘りの事さ「でも貴方はーでも今まで秘密黨の寄會などでお顏を見た事もありませんが（榮）今までは成るべく自ら隱して居た斯なれば隱すべき場合でない町川も柳條君も共さ私の言ふ所を聞きたまへ」二人は齊しく耳を澄して榮三の前さ進みぬ（榮）實さ驚くちやアないか老白狐が未生て居るぜ」柳條も町川も聲を揃へて「ナニ老白狐が」と問



翻る（榮）爾サ我々が既さ國事探偵と見破ッて穴の中へ活埋さしたアノ憎むべき老白狐が」町川は目を見張り「ナニ其樣な事がある者の一旦活埋さした者が何うして生て居る者か（榮）イヤ確さ生て居るさ私が確さ其顏を認たから（町）夫は何時所何で何うして（榮）ナニ唯ッた今の事で用事があつて他出して我家へ歸る道で彼れさ逢たから直さ引返して茲へ來のだ（町）では彼れ何うして居た（榮）大形の辻馬車から降て頻りさ其馭者さ何か問ふて居た大形の辻馬車と聞き柳條は忽ち心に疑ひを起し「貴方は若し其馬車の番號を覺にては居ませんか（榮）夫を忘れて成る者か六十六號と書てあつた柳條は愈々顏の色を失ひ「夫だ〳〵」町川君今の馬車だぜ（町）成る程今の馬車も六十六號であつた上田君全体其老白狐い何の樣うな風の男だ（榮）私が先ま見た時とは全く姿を變て居たが何の樣さ變たとて私を欺く事は出來ぬ背がスラリと高くて黑い八字髭を附け白い上被さ黃色な胴服て」町川は飛上り「是は不思儀夫だ〳〵（榮）夫だとは何が夫だ（町）僕と一緒さ、べリゴーへ行き今又柳條と一緒さ、車馬さ載て來た國事探偵烏村槙四郎

だ榮三い斯く聞きては爭でか驚かざるを得ん「エ君の最初の手紙よ在た自稱士官梶田とか云ふ男か(町)爾ナ其奴が全く兼て話した柳條の從兄鳥村で其鳥村が即ち探偵の老白狐だ六十六號の馬車から降たと云へば最う疑ふ所はない彼れ今六十六號の馬車よ乘り此家の前で僕と柳條よ分れたから所よて老白狐と鳥村槇四郎と同人なる事全く分れり柳條は頓て又而見ると彼れ確よ僕を牢よ入る積だ夫で其馭者よ聞て居たのだ生憎とアノ馭者が僕が獨逸士官を殺したと云ふ罪よ落さうとするかも知れぬ(榮)孰れよしろ前い直よ逃るが好い(町)爾だ最う此家よい一刻も居られぬヨ鳥村が知て居るから」左れど柳條は敢て逃んともせず深く考へよ沈む樣子なりしが忽ち顏よ疑ひの色を浮めて「サア大變だ愈々大變な事をした果して老白狐が活て居ると分れバアノ夜我々が老白狐と間違へて活理よしたのい人違だ我々は全く罪のない者を殺したのだ」道理ある此一言よは榮三も町川も愕然として震ひ上れり(柳)ソレ見た事か袋の儘て顏も見ずよ理るのは卑怯千万な仕打で男子のする事でないと僕が言たのにアノ大首領が



聞ぬからーエ、我黨の首領は實よ汚らはしい奴ちやなア彼の樣な卑怯千万な人殺しを仕て盲開きもせず間違て殺された憫むべき彼の者い誰だら定めし我々を怨で居る事だらうが」と我を忘れて罵しり出せバ榮三は之を聞くよ堪へざりけん驟然起て柳條の前よ立ち「其大首領どい斯く申す上田榮三だ此榮三が秘密黨の大首領だ」柳條は宛も頭上より冷水を浴せられし如く身を震い せ「エ、、貴方が(榮)爾だ如何にも私だ定め~私を卑怯とも汚らはしいとも思ふだらう私も全く老白狐と思ッた者が今更人違ひと分ッては何の言譯もあいに依て今までお前と結んだ約束は是切りて一切取消さう私の樣な汚らいしい男と交ッたが不運と斷念め是から全く嘸闘係の人となるが好い柳條は赤かりし顏の色を忽ち又青くおし榮三が前よ鰐伏し」今までの無禮は私しが惡かッた何うぞ何うぞ許して下され」と云ふ町川も知ぬ顏する時よ非ずと」何だ詰らぬ事で彼是云ふ時ではない互よ一つの目的の爲め一つの敵を引受て一緒に戰ふ身ていあいか」と云ふに榮三も柳條も忽ち心解け今までに例もなきほど固く手と手を握り合しが是ぞ

二人をして今までよりも猶一入親からしむる繋縄とも云ふべきのみ柴三ハ良ありて四邊を見廻し「斯云ふ中にも油斷がならぬ柳條君は早く立去らねばと云ッて併し行先が未極るまひと云ふ言葉の未だ終らぬうち案内も乞はず突々と入來る二人の巡査柳條の傍へ進み「貴方が柳條健兒ですか獨逸士官を殺した嫌疑に依り拘引します」と其儘柳條を引立去れり扨は全く柳條の推量通り彼の老狐白槇四郎が先の馭者より問ひ出ん柳條を捕縛させしか町川と上田とハ餘りの失望に物をも言ハず唯顔と顔見合すのみァ、柳條牢に下されてハ彼の大金ハ終に槇四郎が手に落ん今までの爭ひハ槇四郎の勝とあらん噫

## 第四十五回

甕の儘、活埋にせられたる國事探偵老白狐が猶ほ生存へ居るのみならず實ハ鳥村槇四郎ありとハ驚くべき限なり左すれバ老白狐の身代となり眞實埋らをしハ何者なるぞ又此老白狐鳥村槇四郎の計にて捕縛せられしハ柳



條健兒ハ如何よあり行くべきや是等の條ハ追々説分くるとなし茲には先づ栗山角三が事を記さん角三ハ町川鳥村等と同じく此頃ペッゴーより歸り來しも彼れ猶ほ充分なる結果を得ざれば棒田夫人に向ひて確なる話をせず唯曖昧よ「イヤ追々事が運ぶから無言て待て居るが好い」と答へ又我が澤子よハ近々柳條を連來りて婚禮さするゆゑ夫まで音無しく待つべしと告るのみ其顔色を伺へど彼を安心して打喜ぶ色もなし左れバとて痛く失望の体も見えねバ定し胸中よ猶ほ様々の計略を蓄ふるとあるべしペッゴーより歸りたる翌日角三ハ直ちよ使を出して彼の下探偵小根里を呼寄しが程なく小根里入來りしかバ之を連れて一室よ入り四方の入口を堅く鎖して角三巳の留守中よ何か大切な事を探り出したか」と問ふ(小)ハイ彼の怪い男の身の上よ就き種々の事柄を聞きました(角)フム怪い男とハ先日郵便局て今井兼女の名を騙り其手紙を取んとした奴のあとか(小)ハイ(角)實ハ己も今まで彼の男と一緒よペッゴーへ旅行して居たのだ(小)エ彼れと一緒よ(角)爾サ(小)道理て彼の男が此頃久しく姿を見せぬと思ひ

ました成るほど貴方と同じくペリゴーへ行たのですか(角)ペリゴーへ行て色々己の邪魔をしたが其お影で己も先づ彼れの身の上を知り彼れが余女の手紙を手よ入やうとした其目的まで見破ただから別よ最うお前よ聞く程の事はないが唯知度のは彼れの住居だ彼れ全体何所に住で居るのか(小)夫ハ最う私しが悉皆調てあります彼ハ警視總監直轄の國事探偵で綽名を老白狐と云ふのです夫で本統の家ハニュドベド街よ在ますが其外に猶ほ事務所の様よして居るのハ湖南街十三番地の小意氣な家です是ハ彼れの秘密事務所で餘り知る人ハありません私しが夫を何うして聞出したかと云ふよ同じく警視總監よ使ハれ彼をよりズット下級よ居る第三十三號の探偵よ聞たのです(角)誰よ聞ても夫ハ好いが其外にハ(小)ハイ其外に彼れの妾宅とも云ふべき所があります夫ハグランジ街十六番地で添田夫人と云ふ意氣な年増の住で居る所で其年増が彼れの色だとも妾だとも申ます何でも彼奴暇な時にハ大抵其家へ入込んで居る相です是だけの報告を聞き角三ハ暫し考へ居たるが口の中にて(フム グランジ街が妾宅で湖南街が秘密の事務所か)と呟けり小根里ハ又も首を差延べ(其事務所の事に就き奇妙な話があるのですよ是は第三十三號が直々私しへ話た事だから間違はありません先頃第三十三號は警視總監から今夜考白狐を呼で來て呉れと命ぜられ本宅から妾宅あど探しても老白狐の姿が見えぬので到頭湖南街の事務所へ行たと申ます彼奴探偵は上手だけれど一方ならぬ懶者で暇さへあれば遊び歩き夫が爲め警視總監が急に呼寄せやうと思ッても居所が分らなくて用事の間に合ぬ事が度々あると云ふ事です扨第三十三號が湖南街へ尋ねて行くと彼れの事務室にポンヤリ燈が付て居るから彼れかと思へば彼れでなく矢張り彼れの様よスラリとした姿だけをど彼れより少し背が低く身体が細かッたと云ひますが髪の毛が先黒い方で旅行服を着た一人の男が人待顔に控て居たと申ます(角三は此人相を聞て忽ち非常なる手掛を得たる如く今までの落着たる様子よ引替最と切込し色を現し(フム旅行服を着けたスラリとした男フム髪の毛が黒くてフム夫ハ全体何時頃の事だッさ(小)何でも巴里ハ囲れて居る頃で日曜の夜だッたと

云ひますから左樣サ七月二日てせう（角）フム七月の二日の夜か夫から何うした（小）夫が第三十三號ハ老白狐だらうと思ふたけれど爾でないので扨何者だらう何うして茲に居るだらうと竊に次の間へ這入ッて樣子を窺ッて居ると其男は待乘たと云ふ風で老白狐の机の傍へ寄り腰から二挺の短銃を取出して机の上へ置た相てす（角）フム二挺の短銃を夫から（小）ハイ夫から何です三十三號の思ふには何でも此男大金でも持て居るか二挺の短銃とハ用心深いが夫を腰に附けて道中した爲め餘ほど草臥れたと見にる夫で先づ短銃だけ卸したなと思ッて居ると誰だか門の戸を徐々と開る樣な音がします其所は探偵だから耳が早い扨は老白狐が歸ッさかと遙に門の方を見ると何うでせう老白狐ではなくて怪い風体の男が手に〳〵得物を持て四五人這入て來たのですオヤ〳〵此奴强盜か探偵の家へ這入るは可笑い奴で何うするか先づ見て居やうと三十三號は益々息を凝して居ましたと言來りて小根里は我が話しの直打を探らんとする如く角三の顏を見上ゲたり



## ●第四十六回

探偵小根里ハ角三が充分に聞入る顏色を見て乘氣になりて言葉を進め「怪しい四五人が忍び込みましたけれど件の痩た男は夫と氣附ず餘り老白狐の歸りが遲いから手紙を書て置ふとでも思ッたが卓子の上ゑ在る紙を延べ何か少しばかり書初めました此時曲者ハ戸の口まて忍び寄り中の樣子を窺ふて彼の男が手紙を書て居るから的きり老白狐と思ッたかソレと云ふ合圖と共に四五人一時に飛附きましたが此時硝燈が消えた爲め何をしたか分りません暫が程は唯ゴタ〳〵と騷わぐ音ばかりで其中にソレ囊を〳〵と云ふ聲も聞えましたが頓て曲者は前の男を囊の中へ入れたと見え一同で擂いで立去たと云ふ事です三十三號の鑑定ては何でも老白狐に怨みのある奴が老白狐と間違へて其男を囊に入れたに違ひないと云ひますが間違られた其男ころ好い迷惑じやありませんか」と手柄顏に話し終れば角三は騷ぐ胸中を推鎭めて「其ゴタ〳〵と騷いで居る中に件の女イヤサ男

ゝ聲を立て相な者であッたが（小）聲を立る暇があかッたと云ふ事です何でも猿轡でも食したのでせう（角）夫から曲者は其男を何うしたのだ（小）夫から何うしたのか三十三號も實は我身が大事だから追掛て若し怪我でもするより知らぬ顔て見て居るが安樂だらうと曲者の立去る迄息を凝して潜んで居たが其後は何の事もないので知ぬ顔して立去たと云ふ事です（角）立去て夫から老白狐に其事を話したのだらうな（小）イヱ未話さぬと云ふ事です立去ッて直樣警視總監の家へ行くと老白狐は既に總監の許へ行き何か話して居るに由り三十三號ゝ最う用事はあるまひと物をも言ず歸ッて來ました三十三號は此時老白狐の顔を見た切で夫から今まで老白狐に逢ゝぬので固より其事を話す暇もなく夫に其頃は政府が代替りの時だから若し迂濶な事を云て免職にでもなッてはならぬと用心の爲め其事ゝ誰に向ッても口に出さず私しに話したのが初めだと申ました」角三は是だけ聞きて少し安心せし如く「好し」と一聲呟きし儘突と立ちて室の中を右左に歩み初めぬ歩みながら角三は何事を考へ居るにや手足の振々と震へ



る所を見れば心中の騒ぎゝ一方あらずと察せらる茲に角三の胸中を寫さんに彼れペリコーにて今井兼女に逢ひ何事をも聞得ざりしとは云へ中々くの腕こきなれば既に棒田夫人へ宛たる第二の手紙に記せし如く兼女が彼の遺言書を姪お梅に托して巴里に送り出せし事を聞附け猶ほ彼れ是れと詮索せし末巴里より兼女に宛て手紙の來りし事まで探り得たれば彼れ探偵の腦力を以て其手紙の必ず鳥村槇四郎より出たるを察し又鳥村が今猶ほ其お梅に逢得ざるより態々ペリゴーへ尋ね來りし事鳥村即ち柳條の從兒にして大金一條に附き我が敵なる事等悉ごとく探り知たれば此上はお梅の後を尾くるに如かずと直ちに活潑なる運動を初めお梅が家の近傍に住へる人々は云ふに及ばず馬車會社の雇人より其邊に徘徊せる乞食に至るまで悉く問合せし末終るお梅が男の姿よ化けて巴里に入たる事を知り此上は巴里を探すの外なしと見極めて隙さず歸り來りし者なり去れども お梅が巴里に入てより何所に行きしや多分柳條の家と思ひて鳥村の家に行きしに相違あしと是だけは推量せしも鳥村の家も知らずに又鳥村が何

故にお梅に逢ひ得ずして態々ペリゴーまで兼女を尋ね行きしや夫等の廉々更に合點行かず獨心を惱し居たる折から今幸ひよも此話を聞きたれば一切の不審い宛も雲を拂ふ如く晴れ渡れりお梅は大事の遺言書を持ち巴里へ來りてより宿屋にも着かず男姿の其儘にて直ちに湖南街十三番地に尋ね行き折から鳥村が留守にして何人も居合せざりしゆゑ其歸りを待ち居るうち運拙くも曲者より老白狐と間違られ嚢に入れて孰れにか連れ去られしなり是迄は角三の心中よ星を指す如く分りしかど扨此後い如何にせしや此曲者は何者にてお梅を孰れへ連れ行きしや連行きて殺たるや將又生して隱しあるや是等の事を知るは老白狐に如くはなし彼れ若し已れが何人より憎まれ居るやを考へあば已れを嚢に入れて運び去らんとするは何者なるかをも悟り得ず左されば我れよりも彼れこそお梅の有家を尋ねるに都合好き身の上なり鳥村が何人に憎まれ居るや彼の曲者が何者なりしやは鳥村の外に知る者なく從ッてお梅が連去れて行れしやは鳥村ならでは推量し得ず角三は是まで考へ來りて最痛く失望せしかど頓て又考へ直しイヤ〳〵鳥村は猶ほ三十三號に逢はざる故お梅が曲者よ取去れしを知る筈なし左すれば我れ今彼れの許に行きお梅の在家を知る丈の手掛りを告る故我れに百万法も與へよと云はゞ彼れ承知せぬ筈いなからん若し三十三號が彼れに逢ひ曲者の一條を話聞さば待れ直ちに本末を悟り我が計畧は外るれど猶ほ三十三號が彼れの許を尋ねぬうち我れ先に彼れに逢ば彼れ必ず我口よりお梅の手掛りを得ん爲め山分の約束せん今までい柳條を相手にしたるも今は一歩の間違にて鳥村に勝を得るゝ最際疾き塲合なれば柳條を捨てゝ鳥村に附くに如かず鳥村に逢ひて君と我とは同じ遺言書を探す身なり互に敵とあらんより共に味方とあり力を合すに如くはなく力を合せて其儲を山分とせば我れよ損なく君に益あり君もお梅の有家を知らねど君い我が知らぬ所を知れり我れは又君が知らぬ所を知れり二人の知る所を着合せばお梅の居所は直に分らんと云はゝ彼れ萬更の野暮に非ず我が目的は成就せんと角三は茲に全く思案を定めしが斯く定まりては唯だ三十三號が鳥村に逢ぬうち我れ其先を越して彼れに逢ふの一方

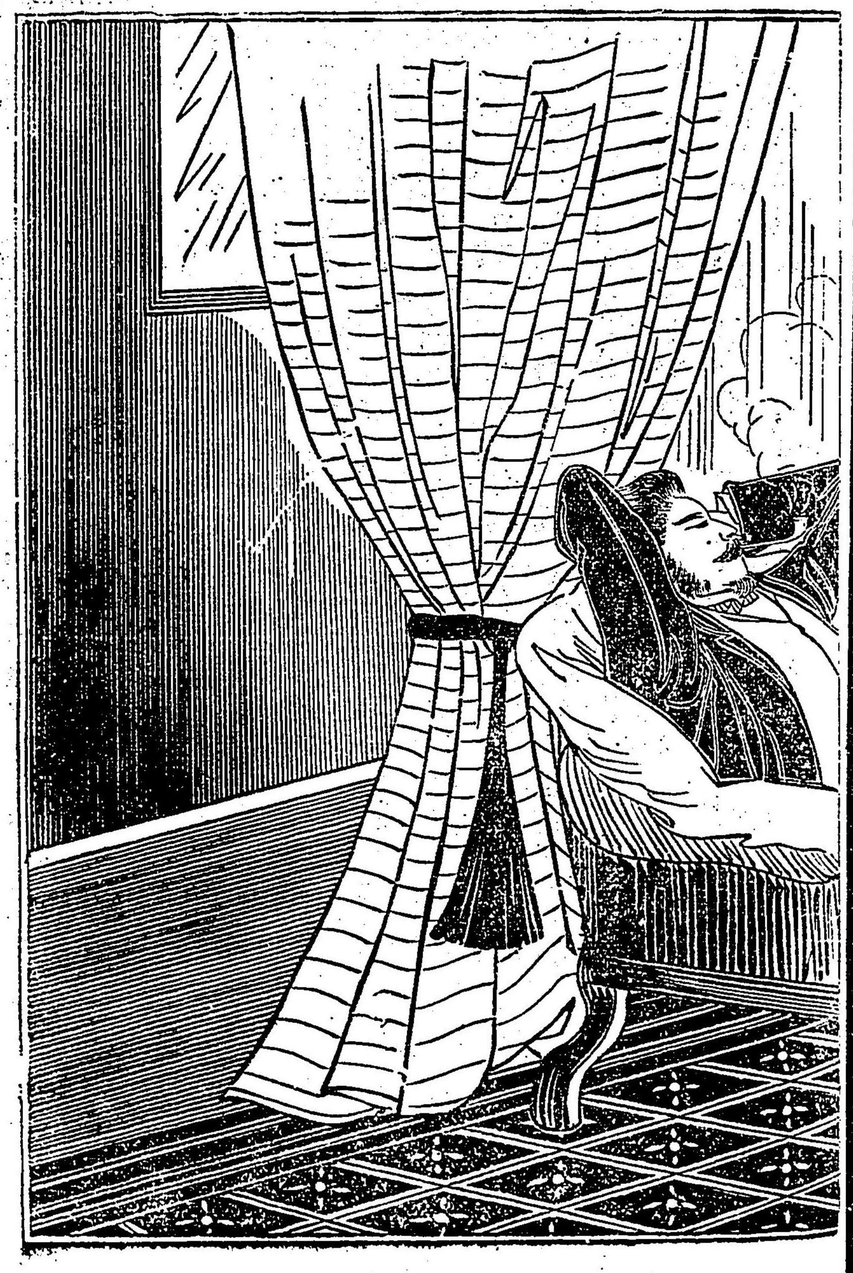
わり一刻の猶豫もならず是より直ちに出行かんと角三早や其仕度に掛り
たり

## 第四十七回

競馬ゝ唯一歩よて勝負を決し掛引は唯一刻の差にて敗るゝ事あり況てや佛國第一等の探偵と聞えたる老白狐烏村槇四郎を相手とし二百万法を爭ひたる栗山角三にして何ぞ要もあき猶豫をなすべき去れば彼れ瞬く暇に思案を決し今ゝ唯だ烏村に逢ふの外なしと手早く身仕度を整へつゝ傍に在る下等探偵小根里に打向ひて「已は一寸其所まで出て來るから已の歸るまで侍て居ろ」小根里は其氣を察して「夫でゝ今私しの話した事が非常な手掛になつたと見えますな爾あら爾で夫だけの褒美を戴かねバ」と際疾き所で強談んとす小根里も中々の強者なり(角)イヤ手掛に成るか成ぬか行て見ねば分らぬヲ歸つた上で褒美は何うともする好か已の歸るを待て居ろ歸つた上で直に又何の樣な用事があるかも知れぬ」と云ひ捨て後をも見ず角



三は其儘家を飛出しつ通り合す馬車に打乘り「サア馭者價ゝ幾等でも遣るから大急ぎでグランヲ街まで遣て呉れ」と命じたりグランヲ街は烏村の妾宅あり栗山角三ゝ兼て烏村の氣質を察し彼れ極めて探偵に巧あれど又極めて怠者なるを知れば昨日ペリゴーより歸りて以來其本宅へは立寄らず今猶ほ妾宅に在んと思ひ殊に八時宛も中食の刻限なれば烏村が食後猶ほ添田夫人の顏を眺め雜談せるに相違あしと充分の見込を附けて馬車を走らするよ僅二十分ばかりにして其家の前よ着きたれば角三ゝ臆面なく玄關に進み入り案内の鈴を鳴したり是までゝ事なく漕附しも扨如何よして取次を請ふべきか我名を告れば面會を斷はらるゝも知れず去れバとて警視總監よりの使ひとも偽り難し殊よは彼れ此家にて如何なる名前を用ひ居るや眞逆に老白狐にも非ざるべく又實名の烏村にて分るべしとも思ゝれずと彼是思案する暇もなく早や小女が取次に出來りたれバ角三は思ひ切て「旦那よお目よ掛り度い私はペリゴーのら來た者だが」と云ふ烏村之を聞けば必ずペリゴーなる公證人の來りし者と思ひ万事を捨置きて面會せ



ん良ありて小女は再び現はれ「何うぞ此方へ」と請ひたれば角三は其後に從ひ行くに暖房室と食堂を兼しかと思はるゝ最立派なる室へと通されたり室内の樣子を見れば片隅ゑ長椅子二脚を置き一方の棚には酒器あどをも並べたり餘程懇意の人ゑ非ずば此室ゑゝ通さぬならん角三は宛も全權公使が敵國の外務大臣に面會する如き氣持ゑて充分に威儀を正し重々しく椅子ゑ腰を卸したるが是ぞ之角三と鳥村とが公然名乘合ひて運動を初めるの發端なり平和の條約となり山分の相談調ふか平和破れて戰ひの元と なるか唯角三の掛引一つに在る者なれば角三も氣ゝ氣に非ず談判の初より餘に我が胸の中を打明過ては敵に我が秘せる所を大方ゝ察せられ其上彼れに侮りを受ん夫かとて餘り包み過てゝ彼の疑ひを招き何の甲斐もなくして止ん實に掛引の微妙なる腥物に障るが如くあり此時合の入口を開きて鳥村ゝ徐々と入來り角三の顏を見るよりも「ハヽア、ベリゴーから來たと云ふから必ず貴方だらうと思ひ金緣の眼鏡を掛た人じやあいかと取次の小女に問ましたと意外に慣々しく口を開けり（角）爾慣々しく仰有て下



されば大に用向も言出易いと云ふ者です短兵急ゑ早や我が用事の緒口を開かんとす（鳥）イヤ貴方が金眼鏡の上から私しを眺める其目附が變だから必ず何かの用事だらうと思ひましたし」と云ひながら酒器棚の方を見廻せしが先づお互に此儘てゝ話も出來ぬ一盃酌ませうよと云ふ此樣子を見れば彼れ既に食事中幾杯をか傾けし者あるべし角三は鳥村の氣質を知れり彼れ一通りの酒好にて醉は益々其口の輕くある男あり我も心を許せし如く見せ掛け其實彼れを醉しむるも一策ならんか（角）此頃の酒は兎角甘味が勝ますので私しの口には叶ひませんが（鳥）是は面白い甘味が勝つから貴くないとゝ貴方も中々話せます幸ひ古製のブランデがありますから」と云ひつゝ鳥村は自ら立て一瓶を携へ來り早くも一盃を角三に酌向けたり角三は一口呑て「結構です」と舌皷すれば鳥村も歡ばしなに「イヤ斯して再び お目に掛ると知ればベリゴーに居るうち充分打解けて置く所でしたが併し貴方は何うして私しの住居を御存ですヤ矢張り蛇の道ゝ蛇ですかヲ（角）何う致して蛇の道ゝ蛇あどと自分で知る事は私しに出來ません唯貴方と

同じく警察に奉公して居る者から聞たのでそ（鳥）ハヽァ成る程と罪もなく受答ふれど早や我が國事探偵なる事まて探りたるかと驚き驚きたる者の如し角三は此圖を外さず「イヤ最う貴方が巡視廳でも幅の聞く事は今までのお手並でも分りますが（鳥）イヤ是は恐れ入るれど先づ貴方が態く態私しの住居をお尋なさッた用向は（角）其用向の事ですテ極々腹藏なく申ますが（鳥）夫が結構腹藏は私しも大嫌ひな方です無論唯のお附合にお出あさつたではありますまひからサァ腹藏なく（角）心得ました話しますとも鳥村さん（鳥）イヤ何うも感心〳〵既ま本名までお探りなさつた所を見れば中々貴方もペリゴーで抜目なくお働きさあッたと見えますな二人は面ま〻は充分に打解けたれど腹の中ハ如何なるべき是より引續く二人の對話を見て知るべし

## ●第四十八回

上部は是れ極めて平和なる判談あり去りながら兩人の心中は如何なるべき角三は故と謙遜して「イヤ最う田舎の人はお多舌だから貴方の本名が鳥村槇四郎だと云ふ事を聞出したのもナニ太した手柄ではありません夫に貴方ハ未田舎の人が能く覺えて居ます金滿中佐の甥御ですから」と茲に初て金滿中佐の名前を持出すに鳥槇も稍や心を動かせしか「イヤ爾まで御存じなら何を隠しませう金滿中佐の甥鳥村槇四郎は全く私しです貴方ハ最う私しが故々ペリゴーへ行た目的も定めし御存でありませうヲ（角）左樣サ何だの分ッた樣な氣持が仕ます斯でせう今井兼女が金滿中佐の遺言書を持て歸り其遺言書には全く貴方を勸當してあるから兼女を欺して遺言書を奪ふ積りでせう（鳥）妙益々妙貴方の御推量ハ寸分も違ひませんが併し一ツ貴方に問ひ度事がある（角）サァ何なりと御遠慮なくお問ひなさい腹藏なくお返事を致しますから（鳥）では先づ最う一杯お乾なさい酒が廻らねば舌が弛きませんから（角）イヤ何に夫ハ他人行儀と云ふ者です最う斯まで打解々た上ハ酔ても素面でも同じ事ですサァお問なさい（鳥）でも先づ爾仰有らずと（角）宜しい戴きませうとて一杯綺麗に呑乾しつ是で好

でせうサアお尋ねなさい（鳥）ナニ極々詰らぬ問ですが貴方も何だか今井兼女に用事があつたと見にます御其用向は何事です飲々旅行券を隠して置て牢にまて入れられるとはエ何の様な用事です尤も旅行券を隠す手段は餘り新しいとも思ひませんが（角）イヤ最う極めて古い手段で誠にお恥しい譯です併し又此古腐い手段でも目的通りには行きましたよ貴方が牢の中へ尋ねて來るのが今一日も遲ければ私しが全く兼女を手に入る所でした（鳥）ですが其兼女を手に入る目的は（角）矢張り其遺言書を欺取る爲でした遺言書が出れば金滿中佐の身代い一文も貴方の手には入ませんから（鳥）てすが貴方を相繼人と定めた譯では猶更らなし貴方がアノ遺言書を横切しやうと「するのも變お譯ではありませんか（角）變な譯にい違ひありませんけれども何故私しが其遺言を欲ゞるか其目的い分りませう（鳥）大抵分ッた樣てすけれど念の爲め直々貴方の口から聞て見たいと思ひます（角）夫は最うお安い御用私しい柳條健兒に賣附る積て（鳥）フム豪い流石い貴方です既に柳條の事まて知て居て（角）知て居るのみてはありせま



ん既ゞ柳條を説附て確かお約定書まで書せてあります（鳥）して見れば私と貴方とい全く敵味方てしたな（角）爾です今でも矢張り敵味方です「少しも臆面なき此言葉に左しもの鳥村も少し小首を傾け」フム矢張り敵ー成るほど貴方い腹藏なく仰有る此點は私しも感心するけれども貴方が此通り私しを尋ねて來た目的が分りませんが（角）其事です實は貴方の心を引に來ましたので（鳥）私しの心を（角）ハイ貴方の心を（鳥）成る程今までい敵であるが是ゞら共々に其遺言書を探さうと云ふのですな（角）實に貴方はお察しが好い全く其通です全く貴方と腹を合せて詮策したいのてす（鳥）でい貴方既に遺言書の中味を讀ましたか（角）ハイ讀ましたと云ひたいが實い未讀ぬのですけれども讀だよりも確に知て居ます全く貴方にハ一文も分て呉ぬ樣に書てあるは受合てす「鳥村は暫し考へ」シテ見れば私しは其言遺書を探さぬ法が利益です貴方と一緒ゞ其遺言書を探し出せば叔父の身代は一文も私しの手には入らず此儘探さずに居れば誰も見出す事が出て來ぬから叔父の身代い自然と私しの物にあります此尤もなる言葉には角

三も實は悸ッとせり彼れ探さずに居れば誰も見出す事が出來ずと言切るは既にお梅が曲者に運び去れしを知りお梅の行方い自分より外よ知る者あしと見極めしか此見極を附ゝとすれば角三の辛苦は水の泡あり角三は殆んど失望の溜息を洩さんとせしも茲ぞと自から憤發して「成るほど貴方は此遺言書の世に出ぬのが利益でせうけれども貴方が探さずに居れば柳條の手に落ますが（鳥）だッても貴方は柳條の爲を思ひ私しは自分の爲を思ふのだから相談の纏り樣がありません（角）イヤ夫が貴方の思ひ違ひです私しもすユ柳條の爲を思ふのではなく詰る所ろ自分の爲を思ふのだから其遺言書を柳條に賣ても貴方に賣ても同じ事です（鳥）成るほど貴方の了見い公平だ私しいでも柳條へでも代價の高い方へ賣附やうと仰有るので少しも依怙贔負がないのだから（角）如何にも其通りですサア買ますか（鳥）先アお待あさい貴方は其遺言書を持て居ますか「此問を聞き角三は初めて安心せり島村若しお梅を已れと間違られて曲者に連れ去られし事を知らば斯ゝる問を發する筈なし此問を發するい彼れ猶ほ全くお梅の一條を



知らぬが爲あり思ふにお梅が男姿をして此巴里へ來りし事をさへ彼れ猶ほ悟り得ぬならん斯く思へば心強く（角）イヤ今持て居る譯ではありませんが貴方が買ふと云ふ約條さへすれば其有家の分る樣に貴方の手に入る樣にして上ますサア買ますか買ませぬか返事は唯一言で好御座いますと漸く敵の本城まで迫寄たり

## ●第四十九回

「サア買ますか買ませぬか」と問詰めたる角三の言葉に鳥村いグッと一杯を呑乾して「イヤ暫くお待なさい成るほど買ぬとは云ひませんが買ふにしても未色々と貴方に聞度い事がありますが夫を充分聞た上でなければ約條も出來ません（角）夫は御尤も（鳥）全体私しにハ貴方の身分が分りませんべりゴーへ行く道では商人の隱居との話してしたが夫を私しが信ずるだらうとは貴方もお思ひなさるまひ（角）重々御尤もです勿論商人の隱居ていなく實の所貴方と同じく警視監總直轄の探偵を勤た事もありますので其

頃探偵社會で本井と云へば飛鳥を落す勢ひもありました（鳥）成るほど貴方が本井探偵と云はれた人ですか本井と云ふ名い聞た事もありますか生憎其頃私くしは外國詰を言附ッて居ましたから今まで貴方が本井探偵だらうとい夢よも知ずに居ました道理で何ぞも手強い所があると思ひました通例の人なら斯根氣能く私しの邪魔をする腕前いありません實に最う敬服です敬服〳〵殊に初て貴方が郵便局から私しの後を尾けたアノ時の非役士官の打扮などは何うしても贋物とは思はれませんでした（角）イヤ大を又丸て小兒の樣に扱ッて不敬の罪に落さうとした貴方の手際も感心です（鳥）けれども貴方の打扮が旨ひから本統の非役士官が自分の同僚と思ひ貴方を救ッたのは全く貴方の手柄ですよ是ぼどのお腕前だからべッゴー行きの馬車の中でも定めし私しを見破たてありませうヲ（角）ハイ漸との事で見破りました（鳥）何うしてお見破なさッたか後學の爲に伺ひ度ものですが（角）頬片の痣に生て居る毛の色で見破ました貴方が髭の毛も髭も黒いのに痣から芽を吹て居る二三本の毛が赤いので扨ば髭の毛も



染てあるなと夫から段々に考へました（鳥）イヤ何うも其眼力にい恐れ入ました成るほど痣の毛い厭に延易いので其前日剃たけれど最う芽を吹て居たのですか以後充分に注意しませう是は何うして貴方の樣な黒人でなくては氣の附ぬ所です（角）ですが貴方も無論私しをお見破なさッたでせうヲ（鳥）ハイ彼の宿屋で晝食をした時に（角）爾でせう私しの眼鏡を跳落したお手際なぞは實に感服の外ありません（鳥）イヤ最うアレハ探偵のいろはです彼れよりもソレ山路へ掛ッた時馭者を欺して貴方を捨て仕舞さアノ計畧が充分甘く行くだらうと思ひましたが相手が貴方ですから矢張思ッたほどの結果を得ませんで誠に今更らお耻しい（角）イヤ彼れも同じく貴方のお手際でしたが私しは百性馬を雇ふた丈餘計の散財をしましたせ（鳥）長い道中ではお互にアレ位の惡戯をせねば退屈でイヤ何の彼のと思はず話が枝道へ入ましゝ再び肝腎の用事に返ッて全体貴方が今井兼女の事及び金滿中佐の遺言書の事を嗅出したは何う言ふ譯です約束をする前ゝ是も聞て置ねばなりませぬ」と又も初めの如く眞面目になりて問出

せば（角）私しは先日まで大暗室の支配人を勤て居ましたので（鳥）成るほど爾と氣の附なんだは私しの未熟です大暗室で兼女から柳條へ送る手紙を開封したのですな（角）ハイお察しの通りです（鳥）夫で遺言書の一條を知て一直よ貴方は私しの許へ掛付て來相な者ですが夫を反ッて私しの敵に當る柳條の所へ行たとは不實じやありませんか（角）イヤ何方へ行ても何うせ不實ッ我物でない財産を幾等か食取うと云ふ恐しい目的ですから（鳥）違ひない何方へ對しても公平に不實ですな（角）夫に又貴方が鳥村だと云ふ事は其頃まで知ずよ得たから止を得ず柳條の方へ行たのです（鳥）實に柳條が私しよりも幼稚で相手に仕易いからでせう（角）先ア其な者です鳥村は愈々容を正しサア是で最う貴方に問ふ丈の事は問ました是から貴方の仰せを聞ませうけれども私しも故々ペリゴーへ行た甲斐に隨分大切な事を聞出して來ましたから事に依ると貴方の知を居る丈の事は私しも知て居るかも知ません若し貴方の知せて下さる事柄が既に私しの知て居る事柄なら私しに約束を結びませんぜと念を推せり（角）勿論です今ま



で二人とも食ず劣らず詮索したから互に種々の事を知り私しの未知らぬ事を貴方の既に知たのもありませうけれども私しは又貴方の決して知ぬ所を知て居ます是が即ち秘密です此秘密を貴方に賣うと云ふのです（鳥）宜しいサア聞ませう果して私しの未知ぬ所の夫とも既に知て居る事か聞けば分りますから（角）イヤ貴方に中々お如才ない私しに言せて仕舞てフム夫だけの事なら己も知て居たと斯仰有られても私しは致方がない樣な者ですけれども互に爾う狡猾に搆へては果しがないから先づ私しから口を開きませう少し口を開いて眞に大切の秘密と認むれば無論貴方が其後をお買取にありませうから（鳥）勿論ですサア仰有い（角）宜しい申ますぜ第一金滿中佐の遺言書は今井兼女の手にはありません兼女は自分の姪に其遺言書を渡しました（鳥）夫うら（角）姪の名はお梅と云ふのです（鳥）夫から（角）お梅に六月の末に此巴里へ向け出發したのです（鳥）夫から（角）イ無事に此巴里へ着ました是よに一々證據があります（鳥）夫れから（角）イヤ其手に食ませんよ夫れから〳〵と仰有る圖よ乘て皆多舌ては寶を只取

れる樣な者です(鳥)でも此だけの事ハ私しも知て居ますものと極めて穩かな聲よて云ふは其實未だ是ほどは知ざりしやも知れず(角)イヤ是だけは御存でも此先は知ますまひ是から先が私しの寶です此お梅が巴里へ來て何をしたか何うなッたかと云ふ事を私しは知て居ます約條さへ極れば夫を殘らず貴方に知せ貴方が自分で行て其遺言書を取て來る事の出來る樣に話して上ます鳥村は少し考へ成るほどお梅が遺言書を持て此巴里へ來て居るのら今丁度此巴里の何所に居るか夫を敎へて下さると云のです子(角)其通り〳〵(鳥)フム夫で其謝禮ハ幾等です(角)無理な代價は申しません金滿中佐の遺產が二百万法以上ありますから私しは百万法だけ戴き度のです(鳥)宜しい充分に分りましたが併し百万法と云ふ金ハ大金です之を遣うと約束するには容易の事でないからして私しも篤と考へて返事をしますが其前に未貴方に問ふ事がある貴方は明瞭に返事し舛か(角)し升とも如何にも百万法と云ふ大金ハ容易の事でないソレを私しに呉やうと云ふ約束を爲る前には色々お問なされ度事がありませう私しは此秘



密の外の事なら何でも無代價で返事しますと言切たり是より鳥村は何事を問んとするや

## ●第五十回

鳥村ハ問を發し成るほど〻貴方は今其お梅の居所を明かに御存じだと爾すればナニモ態々私しの許まで尋ねて來るにも及ばぬ筈ですがエ爾ではありませんか貴方は直々お梅に逢ひ其遺言書を受取て直ぐに柳條の所に持て行けば骨を折ずに柳條から約束の百万法を貰れる譯てせう夫だのに此通り私しの所へ尋ねて來るは何故です是が第一私しの不審する所です流石ハ鳥村槇四郎なり充分角三の弱味を推たる上ならては容易に約條を結ばんとせず角三は例の腹藏なき主義を取り夫はナニ斯言ふ譯です居所は分る事におつて居ても私し一人の力でお梅を捕へ遺言書を取上る事が出來ぬ何うしても貴方の力を借ねば旨く運びが附きません(鳥)フム貴方一人の手にハ合ぬ私しが手傳へバ初めて旨く行くと云ふのてすネ(角)如

何にも爾です今私しと貴方と別々に働いた日には貴方も目的を達せず私しも目的を達せぬ事になります（鳥）分りましたけれども夫で百万法とは餘り報酬が高過ぎませう（角）決して高過ぎません金滿中佐の遺産い元が二百万法以上あつて夫に死でから今まで殖た分を加へれば確に二百五十万法の上もありませうだから若し山分と云ふ日にい私しへ百二十五万法か百三十万法戴かねばならぬが爾まで慾張ても仕方がないから大奮發で百万法に負てあります（鳥）けども貴方の爲には滿吏の他人私しの爲には眞實の叔父に當る人の遺産でせう貴方一人で働ひても私しへ半分以上は寄越さねばならぬ譯ですす況てや私し自からも貴方と共に骨折るとすれば權理は充分私しの方が強いと云ふ者ニ爾てはありませんか百万法い法外に高過ませう（角）イヤ貴方は未幾分か私しの腕前を疑ッてお出なさる此樣な事を云ふてもナニ此老人め梅女の居る所を知る者かと斯お思ひなさるから其樣に高いの安いのと仰有るのですでは何でせう私しが愈々梅女の居所を知て居ると云ふ證據の一端をお見せゲせば好のでせう（鳥）左樣ス證



據の一端をお見せなれば夫よ從ッて又直打を極ると云ふ事もありますが兎に角も先づお見せなさい鳥村い何とかして無代價にて角三の知だけを聞出さんと思ふに似たり（角）イヤ貴方の樣な手強い英雄を相手にして相談するは實に面白い宜しいか一端だけ見ますよお梅は其實男子し化て此巴里へ入込ましたサア是が證據の一端です」と云ひ終りて宛かも是位の事を知せたりとて我胸中にい猶ほ澤山の蓄へありと言ぬばかり無理に笑顔を紋り出せり（鳥）是が證據の一端ですか是だけでは何にもありませんお梅が男姿で來た事い私しも疾よりめ知て居ますと何氣なく言放てど實は心の中にて此老人如何にして我が知ぬ事まで探り知れるやと充分の注意を起せり「私しが言さびに夫位の事は知て居たり仰有られては困ります實際のお話が是から深入は出來ません是れでもか〳〵と貴方が感心する迄話して行けば終に秘密を皆取れる事になりますから大抵茲い等で約束を極ませうサア如何です鳥村は染たる毬を捻りながら考へ初た角三は又無言にて鳥村の顏色を嚴しく眺め詰るのみ稍ありて鳥村イヤ私しが若し意地

悪く搦へれば茲で貴方の知て居る事を殘らず絞り出す事も出來ますが爾してはお氣の毒です依て一言で斷然たる返事を仕ませう貴方が知て居る丈の事は必ずしも代價を出して貴方から聞ずとも私しの腕次第で外から聞出す事も出來やうと思ひます兎も角も貴方と共に働く必要はないから此條約は結びません是ぎりで私しからお斷りアますと明かに斷られて左しもの角三も稍顔色を青くせしが猶ほ故と落着てヘン爾立派に斷はる事い出來ますまひと苦笑ひせり此一片の苦笑ひ實に血の涙より辛かるべし(島)イヤ立派に斷られます貴方は今し方私しに手傳て貰いねば目的を達そる事は出來ぬと確かに白狀したじやありませんか(角)左樣ッ貴方も私しっ助けを得ねば見出す事が出來ぬから詰り五分〳〵です(島)イヤ爾てありません貴方と私しとは位置が違ひます貴方は私しの助を得ず彼遺言書を見出そ事が出來ねば一文にもならぬ人です貴方が遺言書を見出さぬに誰も貴方へ禮金を遣うと云ふ人はありますまひ私しは爾でありませんお梅の隱れたは私しの爲に大利益で此儘お梅が隱れ切に隱れて仕舞へ



ば私しの目的は獨りで達します夫を故々貴方よ大金を遣り共々に探し出すは是ほど馬鹿げた事いありません私しが手傳ねば貴方は何時までもお梅を見出す事は出來ず貴方が見出さねば私しは安心して居られます斯云へば貴方は己が探し出さずとも早晩はお梅が自分で現れて來ると言ひませう成るほど自分で現はれて來るかも知れぬ併しお梅は今現はれました から此遺言書を何うかして下さいと貴方お願でい行ますまひですから今貴方と約束するは私しの大不利益です(角三は之を聞き唇の色まで變りしも猶ほ屈せず假令私しが探さずとも外の人が探せば矢張り貴方の不利益ですお梅も隱れて居るとは云ふ者の實い隱さて居るてはあく此巴里で柳條の居所を探し柳條もお梅の居所を探ーて居るから終にい二人が顔を合せるに極ッて居ます(島)夫は大文夫決して顔を合せません(角)ナニ爾言切れますものか鳥村はグッと落附き貴方は未事、情を知らぬ柳條い既に牢屋へ送られましたぜお梅が幾等探しても牢屋の中まで探す事は出來ません柳條が牢屋とは今聞くが初めてなれば角三も驚き(エ夫は事實です

か（鳥）勿論事實です私しの指圖で既に先刻捕手を送り捕縛の上は極嚴重に禁錮して手紙も出させぬ樣にしろと堅く命じく置ました殊に貴方の來る少し前に下役から愈々柳條を牢に入れたと知せがありましたもの扨て鳥村既に柳條を牢に入れし故夫で彼奴安心しお梅が如何ほど柳條を尋ぬると も廻り逢となしと思へるか我と約條を斷るも之が爲ならん我苦し之に服して今までの骨折も水の泡とあり一文も取ずに止む事とならん今何とはして約條を結ばずは取返しの附く時なしと角三の心急に燥立來るを故と又笑に紛らし「ですが何の嫌疑です（鳥）獨逸士官を謀殺したのですから何うで助りッこはありません」角三は竊に安心し「夫の駄目です獨逸士官の件あら課殺所か立派な介添人を定て公明に決鬪したのですから（鳥）夫を貴方が何うして知て居ます」と鋭く問ふ角三は私しが現に介添人の一人ですと答へんとせしが斯言はば自分まで鳥村の爲に牢に投込るゝも知ずと氣附たれば「イヤ其話しは柳條から直接に聞ましたが獨逸士官の介添人を勉めた英國士官が若もの時にハ柳條の證人に立つと云ッた相ですだから



柳條は遠からず放免されお梅に逢ふ事になりませう」鳥村は猶ほ之を服せず「貴方は未事情を知ぬから爾思ふも無理はないが貴方の未練が殘らぬ爲に悉皆聞せて上ませう柳條ハ其外に猶ほ重大な人殺しの罪を犯して居ます」と今は勝誇りたる風よて云へり「エ此外に猶ほ人殺し夫は何う言ふ事件です」と眞實驚ろきて打問へば（鳥）夫を聞かねば貴方も斷念めが附きますまい少し長いけれど引導と思ッて聞せませう」とは又失禮の言分なれど角三い咎むる事すら打忘れ今は唯水に溺るゝ人が流れ來る鳥毛にでも取附んと努る如く少しでも此面會を永くして切ては一言にても我が利益となる言葉を捕へ之を取附く島にせんと思へるなり鳥村ハ一盃の酒に咽喉を濕し御存か知ませんが此府下に國王を廢せんとする激烈の秘密黨がありまして誰でも其黨の爲に不利益と認むる者があれば黨員中の屈強なる者が其者を捕へて靈の中へ容れ門吾取の岡の下の在る穴の中へ連て行き活理にするのです」角三は是だけ聞き早くも靈の中と云へる一言に耳を留た先に探偵小根里の話せし事と彼れ是れ考へ較べて若やと思ふ心を生し居

も失望の暗黒より東天北はのく〜と白むを望みし如き心地をおし」て夫れ實に慘酷な話てすヲ（鳥）實ハ慘酷で（鳥）實は先年私しが其黨の内幕を探れと命ぜられ樣々の通傳を求めて漸く其黨員にありましたが成ると聞もなく政府が代變にあつたので私しは詳しく黨内の事情を探らずに外國へ出奔しました此度又歸國したに附き再び詮索を初やうと思ふうち御存の通り貴方と一緒にペリゴーへ旅行する樣な事で其方は其地退とおつて居ましたが昨日ペリゴーから歸て來ると私しの運が向て來るのか其黨の一員が私しの許へ自首して出たと云ふ一件です（角）ヘエ黨員の一人が自首して（鳥）ハイ首自して出ました夫で其者の言立ては確かに柳條も黨員中よ交て居るのみか去七月の初めに最も恐しい人殺しをしたのてす（角）アノ柳條ですか（鳥）左樣一同の黨員と共々に手を下した樣子です私しは充分の證據を集めて黨員一同を一網に捕へる積て今朝既に其人殺の場所を檢査よ行ましたが成ほど門苫取の岡の下で湖南街へ向ッた所に不思儀な穴がありますヲ私しも畫とハ云へ別に用意も仕て居ぬから薄氣味が悪く



なり穴の奥まで探らずに歸りましたが兎も角斯樣な證據がありますので柳條は何うせ死刑を免れぬ男です」是だけにてハ別よ取付くべき島もあければ角三は又も燥立て柳條が死刑にあつてもお梅の持て居る遺言書が世に出れば彼の財産は貴方の物とはならず柳條の血筋の者よ傳ハりますぜ（鳥）イヤ法律では爾だけれど夫までには隨分計畧がある先づお聞なさい其穴で柳條等が殺したのは實は其筋の探偵です（角）ヱ探偵を殺しましたか（鳥）爾サ彼等ハ探偵だらうと思ッて殺しましたが實ハ探偵でなく全くの人違てす（角）夫は益々大變ですヲ（鳥）驚き給ふな彼等は私しを殺す積であッたのです此老白狐だと思ッて外の人を蠱に入れ連て行て活埋にしさのてす」アヽ角三は茲に初めて取附島否黄金島に取附んとす

## ●第五十一回

一を聞きて十を知る才智に捷き栗山角三が事なれバ是だけ聞きて早や既にお梅が老白狐と間違へられ蠱よ入れて門苫取の岡の底よ活埋にせられ

し事を知しかど酒ほ探り度き事あれば故と打驚きし風を見せ「ヱ貴方と間違へて外の人を活理にしたのですか」（鳥）爾ですとも（角）ヨヤア何ですヲ誰が貴方の身替よ立たのですヲ（鳥）左樣サ誰だか知ぬが私しの身替に立されたのです詰り私しの幸ひで其人の運が悪いのです」是まで聞きて角三は殆ど躍上らんとする程に喜べりお梅は誰にも見出されぬ深き穴の下に眠をるよな是を探らんが爲にとて今まで及ぶ丈け骨を折しも其甲斐なく今圖らずも我が敵の口より聞くのみかい敵は自ら話しながらも猶ほ事の實を知らず我れに大事の秘密を奪はるゝとも氣が附かずに氣惜もなく打明る可笑しさよ是だけ聞けば用はなし早く話しを切上て此所を立去らんとい思へども待暫し敵も中々の才物ある故我が突然と立去るを見ば必ず心に不審を起し彼れ是れと考へて終にお梅の事を悟らん氣永く話の盡るを待ち何氣なく去るに如かずと又も腰を落附けたり鳥村い斯とも知らず「全体此秘密黨は國王を廢すると云ふ恐しい目的ですから捕たる以上は必ず死刑です柳條も既に其一員であつて見れば死刑は到底免れません



（角）でも柳條が矢張り其時の活理よ關係したと云ふ證據が有ますか（鳥）勿論ありますとも今も云ふ通り黨員の一人が自首して出たのです其黨員と云ふのは其夜私しを捕へる爲め湖南街へ出張した四五人の中の一人で長谷川と云ふ者ですが夫が私しと思ひ今ア す不幸な身替を蠹に入れ門苫取の岡の下へ行た時穴の入口に柳條と最一人の者が見張番をして居た相です（角）見張番だけ事なら其罪は輕いでせう（鳥）ナニ見張番をする位だから必ず主領のら信用を受て居るにい相違なく黨中でも隨分能く働く者に相違ありませんですから愈々裁判となれば柳條も必ず死刑です角三は故と失望の色を現はし「ア、柳條が死刑にあるか夫でい何うしても仕方がない」と云へば鳥村は益々勝誇る色を見せ「だから貴方が斷念める樣引導の爲めに是だけの事を話て聞かせたのです（角）イヤ實に引導になりました併し其裁判は何時頃のお見込です（鳥）フム裁判の日取を聞き夫までに何か工夫を施す積りですか（角）イヤ爾ではありませんが唯餘り恐しい事件ですから愈々裁判と云ふ時よは巴里中が大騒ぎになるだらうと思ひ夫

でお聞ヤしたのです（鳥）何時頃そも分りません私しの積では是より猶氣永く目を附けて彼等が再び其穴に集會を開くまき其穴へ捕手を向け一網で一同を捕へる積ですから」角三ハ爾ですか其時こそ貴方が探偵社會に雷名を轟ろす日ですネ」と云ひたるも猶ほ彼れ痛く心に掛る事あり开は外ならず若しや鳥村がお梅の事を悟りはせぬかとの一條なり今思へばお梅が男姿にて此巴里へ來りし事を彼れよ言たるさへ實は恐るべき言過あり夫さへ知さいりせば彼れ如何ほど智惠ありともお梅が自分の身替に立し事を知る由なきも我れが誤ッて知せしからは彼れ隨分悟り兼まじ夫を悟られては大變なり悟りしの悟らぬか彼れが心を探らんと角三ハ大膽にも「ですが貴方の身代ゐ立た不幸な男は誰てせう貴方は全く心當りが附きませんか」と打問へり此間ゐそ全く勝敗ハ分る、所あり鳥村若し此間よ不審を起さば容易くお梅の事を悟らん鳥村が返事如何にと角三は胸に打つ波を抑へて伺へり（鳥）貴方は何故其樣ゐ事を問ひますこの「ア、角三は悸とせり（角）イエナニ考へて見ると餘り其男が可哀相だから（鳥）實よ可哀相は可



哀相です私しの考へてハ何でも同僚の内だらうと思ひます（角）ヘエ同僚の中で誰か其晩よ居なくなッた者がありますか（鳥）左樣サ了度政府の代り目で免職されるだらうと思ッて辭職した者もあり外國へ行た者もあり一々調べハ附きませんが其中よ必ず行方の知れぬ者が一人はあるだらうと思ひます其一人が即ち私しの身替にされたのです是にて見れば鳥村は猶ほ全くお梅なりとは氣附ぬなり角三は初て安心せり鳥村又も言葉を續き「けれど愈々裁判の時になをば證據の爲めに其の所を堀返し死骸を出して檢めますから誰であるか直よ分ります角三は之を聞き可笑しくもあり又心配にもあり其死骸を堀出さば彼遺言書も亦出來る故鳥村槇四郎ハ自ら叔父の遺産を柳條に渡すに同じ左すれば彼れ藪を突て蛇を出す者あり去れば此事鳥村のみの損失よ非ず其場合には角三も亦一文にもならぬ人とあるべし依て角三は早も心に問ひ心よ答へて裁判の開くる前よ自ら其穴に忍び入りお梅ゞ死骸の懷中を探り遺言書だけ取出さねばならずと決心せり是にて最早や用事はなし体よく蛇を切上んと角三は殊更に失望の

風を作り「イヤ百万法儲る積で來た所ろ相手が自分より腕の立優った人だから大失策です柳條が其通り死刑と極ッて見れば殘念ながら貴方の引導に服して斷念める外ありませんと云ふ鳥村い之を手管と知れば充分に勝たる氣になり是も亦氣の毒相な顔を作り「イヤ貴方の樣な自分の兄弟子も云ふべき探偵家を餘り强く挫いさのいお氣の毒です負て悄々と歸て行く貴方の心を察すれば私しも罪覺が悪い依て愈々お梅の在家が分る日には貴方に一万法分て上ませう一万法だから再び前の話に立歸りお梅の居所を聞して貰はふじやありませんかエ栗山さん貴方も今まで骨折た者を柳條が死刑よなる爲め一文にもならなくては馬鹿〳〵しい折角お梅の在家を探した甲斐もない譯サア打解けてお話しなさい一万法です唯た一言が一万法滿更悪くもありますまい「アヽ鳥村も才子あり充分角三を挫きたる未百万法の者を僅か一万法に直切御して買取らんとす今まで長々と多舌りしも其目的は全く茲よ在しならん角三は心の中に冷嘲へど爾る色を顔よは見せず面目なげに頭を搔き「イヤ爾う信切に慰められては返て痛み



入ます實の所はお梅の在家を突留た分てはなく知た丈は既よ言て仕舞ひました最う一万法が十万法下さッても少上る種が盡たのです鳥村は怪みてエ種が盡た其樣な事がありますものか何だか大層な秘密を御存の樣な言出振でしたが一万法を倍にしても宜しいならサア仰有い其代り茲て即金よ拂ひます角三い頭を搔き「即金と仰有られてい義理にも少さねばなりませんが全く種が盡ましたので（鳥）其樣な事はないサア仰有い都合に依ては前金に上ませうサア何うですエ貴方急に忘れましたか忘れたら思ひ出す樣に私しが手傳ッて上ませうサお樂が男姿で此巴里へ入込んだ所まで聞ました其後はエ栗山さん男姿で此巴里へ來て直よ何うしました」角三は「男姿」の語を聞く度に冷冷し今い唯一言にて我が秘密を悟れんと思へば飛追く如くに立上り「イヤ最う私しもお暇よせねば餘り長座を致しました（鳥）爾言はずよ（角）イエ全く用事があります（鳥）でも先ア（角）イエ急用を思ひ出しました」と無理に振切り逃るが如く立去れり立去りながらも心の中には「サア是から直にお梅の死骸を堀出すぞ急か〳〵善い急か」と茲

くめり角三が斯く立去し後に烏村は籠の鳥を逃せし如く暫し呆るゝのみ
ありしが「ハテな馬鹿若人め何故急よ立去ッたか知んとて椅子を離れて立
上り室を右左りに歩みあがらハテな彼奴め轉んでも唯は起ぬ癖にアノ通
り周章て歸ッたは合點が行かぬ何も握らずに歸る程なら初なら此家へ尋
ねて來ぬ筈だハテな何故アノ樣に何故初の勢ひに打て變り何故ーハテ
お面見ると已の口から何か大切お事を聞出したか知ん待よお梅が男姿で
此巴里へ來たと云ッたぞ巴里へ來てから何所へ行たかと云ひながら又室
の中を一周せしが忽ち思ひ附く所あり最悔げに其拳を握り詰め分かッた
〳〵已の身代に立たのがお梅だワエ爾だ〳〵已は柳條の名を騙り湖南街
十三番館へ尋て來いと手紙を遣たのに尋ねて來ぬので不審に思ひ扨は贋
手紙と悟たかと思案を變てベリゴーまで尋ねて行たが其お梅が已の身代
とは知らなんだ爾だアノ角三めお梅が湖南街十三番館へ這入ッたと云ふ
事まで探知り其後を知ぬから聞に來たのだ夫とは知らず浮々とエ最う彼
れに何も彼も知れて仕舞た彼奴必ずお梅の死骸を堀出すに違ひない好々



已も其氣だナニ彼奴に手柄をさせる者か」と又椅子の上へ身を卸し更に工
夫を考へ初めぬ

## ●第五十二回

話し更る銀行頭取上田桑三が家は左なきだに最も陰氣の住居なるに柳條
健兒が拘引されて以來い火の消し如く物淋し主人桑三は馬平侯爵に大金
を返すべき其期限の日に迫るに心を痛め殊には柳條拘引の一條も讀に知
さで徒らに心配させんより隱せる丈隱すに如ずと唯我心に疊みしまゝ尊
ほども口には出さず問るれば少し用事ありて就へか行きしと答ふるのみ
去れど瀨涙孃は戀人同士の感じ易き神經にて何事か柳條が身に降來りし
に相違あしと早くも察して思ひを惱し獨り一室に閉籠り涙に呉るのみお
りしが翌日い堪へ兼例の如く教會堂に詣るとて家を出直に町川友介の許
に行き仔細を問ふに友介は生なか隱し立せんより實を打明け聞かせるよ
如ずと彼の馬平侯爵が馬より溶そ怪我せし事より柳條が之を故ひ國事探

偵と同じ馬車に乗りたる事其探偵が馭者より決鬪の事を聞出し柳條を拘引せしめし事まで詳しく語りたれば孃は唯だ多分其樣な事だらうと思ッて居ましさ」と云ひつゝ一滴の涙を溢し其儘分れ歸らんとするよゞ町川い憫れを催し我力の及ぶだけは柳條を牢屋より救出す事を計るべければ空く愁ひに沈む勿れと懇に慰めし末先頃より我店に使ひある彼の乞食の兒伊蘇普を孃よ附け其家まで送らせたり孃と伊蘇普とは誠に不思儀の間柄にて孃い彼れが便りなき身を憫み殊には我爲に危險を冒して柳條を助けんとせし子供心の健さを愛し伊蘇普い又孃が爲に空腹い目を見ず安樂に身を送る事とありたる其恩を深く感じ孃が爲には何事をも厭いじと思へるあり姉弟の親しき中にも愈り主人と家來の忠愛なる交りより猶ほ深し去れば孃は我家に歸りてよりも彼れを一人返すに忍びず「お前は二三日私の傍に居てお呉れ」と云ふよ「ハイ是から主人に斷ッて參ませう」と答ふ斯て一旦歸り去りしも一時間と經ぬうちに町川の許を得て引返し來りしのば孃い彼れを我傍に置き宛も猫を愛する如くに身の廻に近づけて悲



みも之に聞せ嬉びも之に語る彼れも亦主人の心を以て己の心とし孃が悲めば己先づ涙を流し孃嬉べば己も先づ顏を柔ぐ去れば孃は益々彼を慈み彼れに向ひて我が悲みを語るを迫ても彼れの鬱晴しとし我父に打明ぬ事までも彼れに聞せば彼れ其情に動かされてか翌朝は何事か獨り思案し孃樣私しに一時間ほどお暇を下さい」を言出せり「一時間の暇は遣るが何をお仕だと」問ふに「主人の家まで一寸行て參ります」と答ふ「主人の内へ行くのは好いがお前が居なけりや私しは淋しくてならぬから早く歸ッて來お呉よ（伊）ハイ」と答へて伊蘇普は此家を立去りしが主人が家の方へとては向いずして貴族の住へるワーレン街の方角へ歩み行けり彼れ孰くよ行んとするや噫伊蘇普い小供ながらも孃の心を察し柳條を救んと思へるなり彼れ孃より柳條が馬平侯爵を賂けたる事を聞けり侯爵とは最貴き方にして其人の言葉あらゞ如何なる事にても叶ふべしと思へるより之れよ頼みて柳條を救ひ貰はんとの心なり如何にして爵に面會を求むべき如何にして我が願ひを言出すべき夫等の事は知る由なく固より侯爵が柳條と恨深き懇の

敵ぞとは夢にだも思ひ寄ず唯熱心の一筋よて傍目も振らず進み行くのみ進み〳〵て頓てワーレン街に到れば馬平侯爵の住居ゝ立並ぶ屋敷の中よも殊に高大にして殊に嚴しく古への繪などに見る王城かとも疑はるゝばかりにして身姿賤き伊蘇普の入込得べくも見にざれど伊蘇普は唯だ瀬涙の悲みを弛めんと思ふ一心あり一足〳〵其門前に近寄れり但見をば門より五六間離れたる所に伊蘇普の目を驚かす者ころあれ幷は外ならず其所に佇立める二人の人の姿にぞある一人は年の頃瀬涙に似寄たるほどの女にて顏容も先づ美しく身姿も可なり立派なり一人は四十餘りの男身に黑き禮服を着けたれど日頃紳士の風よ慣れぬと見ゝ禮服更に身に添はず伊蘇普が目にさへも下等の探偵が初て紳士に化けさるにはあらぬかと疑はる此二人何事を爲せるや知られど女ゝ頻に男を說き男ゝ無理に女を推留めんとするに似たり女は孰れ誰が家かの令孃ならんとは見受らるれど其顏ゝ今見るが初てあり男は是れ何者ぞ伊蘇普は十間ばかり離れし邊より其顏を倩々見て打驚けり此男是れ擬ふべくもなく先よ伊蘇普が孃



と共に柳條健兒を救んとてエンファ街に行き高き塀ある家の入口を叩きし時戸の內より猿臂を延し伊蘇普を輕々と家の內へ攫み入れ穴倉に推入れたる男なり是が栗山角三の下僕杢助ありとの名は知らねど顏ゝ猶ほ伊蘇普の目よ歷々と見覺にあり伊蘇普は恐ろしさに震ひ上りしも其熱心は猶ほ消えず此二人何が爲に茲に來り何故に斯く爭へるにや其仔細を知んものと宛も落し物を探す振よて顏を垂れてウロ〳〵と大地を見廻りながら二人の方へ進み寄るよ二人は唯乞食の兒が何か探す事あらんと思へる如く更に氣にさへ留めぬ樣なり斯して伊蘇普ゝ易々と二人が聲の聞ゆる邊まで進み寄りたをば茲よて塀と塀との日合よ身を寄せて路次の中を覗くと見せ掛け耳を澄して二人の推問答を聞居たり男ゝ即ち杢助にして女ゝ栗山角三の娘澤子なるに相違なく二人ゝ何が爲め茲よ來りしや怪しむべき限りと云ふべし

粟山角三の娘澤子と其下僕杢助い何故に馬平侯爵が家の門前に佇立るや伊蘇普は耳を澄して二人の話を聞くに杢助は顔を蹙めて制する聲にて其様な事を爲ッたとて駄目ですよ」と云ふ澤子い更に服する色なく「駄目でも好から無言てお出私は明日まで茲に立て居ていも此内へ這入ます(傍)貴族の家へ知らぬ者が入込めば叱られますからサ(澤)叱られたッて搆ふ者か阿父さんも何うかして柳條さんを救ひ度いと仰有ッてお出だから私しとお前の力で馬平侯爵に賴み救ひ出して貰へばお前は阿父さんから褒美が貰はれるよ」扨い此女も伊蘇普と同じく侯爵に訴へて柳條を救んとの目的なるか(傍)ナニ旦那が褒美など下されませう己のする事に横合から手を出す勿と云ふのが旦那の口癖です者是が分れば私しい直に追出れるかも知れません初めから斯々と有体に仰有ッて下されば決してお伴して來る所ではないのです私しい貴方よ欺されまた是と云ふのもアノ棒田夫人の入智慧でせう女の淺墓な心から斯するが好らうと貴方に話したと思はれます(澤)其様な事は何うても好いから最一度門番の所へ行き取次で



呉れと云てお呉れ(傍)何度云ても無益です」と爭ふ折しも此家に使はるゝ下僕と見え馬車小屋より一輛の馬車を引出し玄關の前に着けさり續いて内より出來る老夫人は是なん侯爵の母君なるべし今しも孰へか出去らんと爲と見え二人の侍婢に扶られ其馬車に乘らんとす澤子い今ぞ好機會と思ひし如く突然杢助の手を振拂ひ門の中に走り入馬車の邊に驅寄れば杢助は驚きて之を引留んと「コレ孃様お待なさい」とて續て走り入んとするに門番直に出來り杢助を堰留たり事の様子を伺ひ居たる彼の伊蘇普も此騷ぎに紛れ門番の背後を潛りて庭に入り誰も心の附かぬうちに庭より又も中庭まで進み込み物影に隱れ居たり馬車に乘んとおし居たる老夫人は見も知ぬ女の走來しに打驚き「何者だ何者だコレお前は何用あッてと鋭き言葉に叱り問ふも無理あらず澤子い自ら小說中の女主人公とおりたる氣にて老夫人の前に立ち「貴女は馬平老夫人ではありませんかと問ふ此大膽なる言葉に老夫人は身を二三寸引延て充分の威儀を示し「馬平侯爵老夫人に何用あッて」と問返す小說中の烈女を氣取たる澤子なれど老夫人の胃し難き

威儀に接して宛も其心を奪はれし如く慇懃に「ハイお願ひが御座いまして綴るのみ(夫)好し〳〵願ひは願ひで好いが何にしても昔の十字軍の時以來血統の連綿を續いて居る侯爵家の老夫人に斯う端なく近づかれる者でないい(澤)ハイ門番に取次を願ひましても聞入て呉れませぬ故(夫)夫は取次ぬ筈の事アノ門前に騒で居る無禮者い詔じや(澤)アレハ私達の父の書記です」老夫人は見下果たりと云ふ顔にて「フム書記懲役から出て來た樣な人相で一コレ門番や其者を外へ出してお仕舞ひ」云はずとも門番は既に杖助を押出せり老夫人は倩々と澤子の姿を眺め居たるが禮儀を知ず作法に嫻はぬ其初々しさに却て一種の憐みを生ぜしが忽ち言葉を柔ゆて「願ひとは何事じや侯爵家の老夫人が端なき少女より斯樣な事を聞くではないが私い外の貴族の樣に分らぬ事を云ふが嫌じやヂヤンチヤックルーソー先生がエルメノンビルに住で居る時分米國人だと云て屢々私の許へ遊び來民約論などの話をせられる夫故私しい貴族あがらも人間平等と云ふ事を知て居るからサア茲で其願ひを聞ふ」と屬す積の言葉あれど前置が大業あ



れば澤子い答ふべき言葉を知ず言んとしても口籠るのみ「サ、何事じや」と再び言れて漸く口を開き「貴方樣のお力で士官を一人お助けなさッて(夫)士官を助けて呉れとあ、分ッた〳〵定めでコルシカ脫島人(ナポレオン)を賤みて云ふ語」に使はれた士官だらう夫が此度國王の歸朝に就き不敬の罪でも犯して牢に入られた者と思いれるが(澤)イエ爾ではありません獨逸士官と決鬪した罪で老夫人い急に乘氣にありフム決鬪で獨逸士官を殺した夫では願ひの次第も聞ふ私は獨逸が大嫌ひて一其國のフレデリク大王も王と云ふ直打はおい實は野心の強い兵卒じや私の友人ボルテル先生とは懇意にしたが私は大嫌じや其國の士官を殺した丈の罪なら助けて遣ませう警視總監の穗内も此頃オトロント公爵に敘せられて頻に貴族社會お交際を求めて居るから私が呼附て言附れば何うかならうが夫より先よ聞たいお前の現け度いと云ふ士官の事名は何と云ふ(澤)柳條健兒(夫)成るほど平民の名じやお前は何故に其男を助け度い(澤)ハイ婚禮を致します爲めよ」物影に在る伊蘇普は此返辭を聞き扨は我が主人顏涙嬢と同じ

く是も柳條と婚禮する女なるかと怪みたり(夫)成るほど婚禮をするなら愛して居るのだお愛して居るから助け度とは好い言種じやけれども緣も緣由もない此私に頼で來るは何故じや(澤)貴方の御子息が馬から落ち大怪我をなされた時馬車に乘せてお屋敷まで送り屆けたのが其柳條健兒です(夫)ハヽァ息子を助けて呉れた人が夫をお前が何して知た(澤)ハイ父から聞ました(夫)夫で父がお前を此通り寄越したのじやな(澤)イエ父には知さず私しが抜て參りましたのです(夫)フム抜けて來さか平民の孃には有相な事じや平民の娘と脫島人の手下と婚禮するい似合しい殊に息子の恩人とわつて見れば左樣ザ息子も今は大方怪我も直り其時の事を大抵は思ひ出したが誰に助けられたか夫ばかりは思ひ出せぬと云ふて居るから私が好い樣よ計ッて遣る」と獨幾度か合首きて老夫人は其儘馬車に飛乘りつ澤子には挨拶もせず馬を急がせて走せ去れり澤子い是れにて我思ひも屆きしと思ひてか續いて門を出外に待居る空助が方へ走り去れり此一部始終を見終たる彼の伊蘇普は宛も夢見る如き心地にて此上如何にせば



好らんと其思案も定まられど何時まで隱れ居るも詮なければ徐々と物影を立出るに此時庭を掃除し居たる下僕の者忽ち其姿を見認め大聲上て伊蘇普を叱り懲す其聲を怪みてか内より庭に向ひたる一方の窓を開き顏を突出す人あり是なん當家の主人馬平侯爵なるべく頭に猶ほ繃帶を施したれど一目見て眸目の尋常ならぬを知るべし伊蘇普い茲ぞと思へば拜まぬばかりに其顏を眺むるに侯爵は樣子を疑がひ「何か此方に用でもあるのかと問ふ此方は嬉さに雀躍し帽子を脫ぎ兩手を開きて窓の方に進み寄りつゝ「ハイ中尉柳條健兒を救ひ出して戴き度いと思ひました」ア、柳條健兒の名は戀の敵として深く侯爵の心に浸入り生涯忘れぬ所あるべし侯爵は眉を顰めハテな手前は柳條の使ひか(伊)イエ柳條が今牢に居るから夫てお救ひを願ふのです(侯)でも夫は手前の願ひであらう伊蘇普い何と答へて好らんか」と暫し考へたる末「ハイ柳條と婚禮する令孃の使です」と答へしは當意即妙の積ならん侯爵は又ギクと驚き「令孃とは上田瀨浪孃か(伊)ハイ(侯)でい何だな瀨浪孃が此馬平侯爵へ柳條健兒を救て呉れと願ひのじや

な」伊蘇普は「ハイ左樣です」と返辭して侯爵の顏を見上るに侯爵は何も云はぬど其眼中に極て異樣なる光あるにぞ伊蘇普は思はずも一歩退きたり侯爵は良ありて好々歸って孃に爾云へ侯爵は確かに孃の賴みを聞た三日の中に返事をすると」言葉と云ひ樣子と云ひ尋常ならぬ樣思はるゝにぞ伊蘇普ば低く頭を垂れ我が言ひし事の好りしか惡かりしか我目的屆きしか屆らぬか夫さへも知らずして唯だ恐れみて其所を退きつ門の外にぞ出去りける

## ●第五十四回

才ある者は勇氣あしとかや彼の栗山角三の如き實に才智餘りて勇氣足らざる者なり彼れ既に島村槇四郎の話しに由りお梅の活理にせらるし事を推量し一時は直に其死骸を堀出さんと迄決心せしも猶ほ恐る所あり今一奮發と云ふ眞際にて心鈍り兎に角も探偵小根里に相談せし上ならでは手を下し難しとて今まで控へ居るとなり夫が爲め今日しもエンファ街の



隱家よて小根里に逢んと約束しあれば金緣の眼鏡を光らせて入來りつ先つ棒田夫人に向ひて「小根里は來て居るか」と問ふ「ハイ先刻參て庭へ出て散歩して居ます」と答へ角三が顏きて庭に出んとするを暫しと留めて「ですが今日は心配な事がありますよ孃が一時間ほど前に李助を連れ何所へか出て行たまゝ今以て歸りませんが」角三は目を見開き「ナニ澤子が出て行た己が外へ出すなと彼れほど言て置くのに（棒）でも私しの言ふ事を聞ませんもの（角）困るなア今に柳條を呼て來て婚禮させるからと言く己が欺してあるのに一又何か多舌ただらう（棒）ナニ私しが多舌りますものか昨日小根里が彼方に話する所を立聞して居たのですよ夫で柳條が馬平侯爵を助けたの其後で牢に入られたのと云ふ事を知たのですよ（角）夫を知て出て行たのなら何所へ行たら（棒）何所だか分りませんが李助が附て居るから心配する程の事はありますまひ（角）でも己の許を得ずに一行先も分らぬ所へ出して了けぬ全体立聞などさせるが惡い」と呟きあがら庭の方に出て行く其後を見送りて棒田夫人は「ヘン探偵の娘だから立聞の蟒は親から

遺傳たのだ」と獨語ちたり頓て角三が庭に出れば待居たる小根里は腰掛より立來りて「昨日緩々とお話を聞く所でしたが丁度至急の用事を命ぜられて居ましたら自分の言ふ丈を言ッてお暇に致ましたが今日は是から暇で殊に明日が非番に當りますから緩りと伺ひませう全体鳥村に逢て非常の結果を得たと仰有ッた其結果とは何事です」角三は立聞く人あるを恐るゝ如く更に四邊を見廻して小根里を樹木の最も茂りたる邊に連れ行き共に腰掛けに身を卸して實はナお梅の居る所が分ッたよ（小）じやア最う何も雑作はない（角）所ろが雑作が大有だ先夜貴樣が話て呉をたアノ臺の中へ入られた男が實はお梅て（小）爾てせう私しも貴方の顔色を見て多分爾だらうと思ッて居ました貴方がお梅は男姿で此巴里へ來たと云ひ又槇四郎から初めて女へ手紙を遣たと仰有ッたから的切りお梅が湖南街へ尋ねて行き槇四郎の老白狐と間違へられ靈に入れて連て行れたのだと斯悟ッたから今までも心を配り其四五人の曲者とは何者か又お梅を何所へ連て行たの内々抜目なく探ッて居ました（角）探ッて何か結果を得のか（小）



結果と云ふほどの事でもありませんが人の話や其頃の事情から考へると何でも國事探偵を憎む祕密黨の仕業ですよ此頃い祕密黨が幾等もあつて隨分國事探偵を酷い目に逢せますら（角）だが夫丈しか分らぬか（小）此上は分りッこはありません直接に老白狐に逢ひ其心當りを問ふて見るより（角）爾サ夫だから己が直に老白狐の所へ飛て行たのサ（小）爾てせう後で考へてアノ素早い掛引には感心しました定めし好結果を得た事てせうヂ（角）左樣分ッた事は分ッた樣だが夫に就ても色々心配があるので先づ聞て呉れアノ槇四郎は己に大事の秘密を悟られるとも知らず浮々と話したが其言葉で見れバ矢張りお前の鑑定通り秘密黨は仕業だ其秘密黨の一人と云ふのが彼れの許へ自首して出たのだ其言立に由れば門苫取の岡の下に穴があつて（小）成るほど彼の下には穴だらけでせう昔から土を取た跡だと云ふ事ですから（角）爾よ夫て秘密黨いお梅を其穴へ持て行き臺の儘て埋て仕舞ッたとよ（小）夫は實に慘酷な話ですヂ夫で今以て埋めた儘であると云ふのですか（角）勿論（小）夫から穴の入口は分かッて居ますか

（角）湖南街の方へ向た所で草が茂ッて入口は外から見にぬと云事だ（小）入口の見にぬ位い何でもないが夫て鳥村は素より其者がお梅だとは氣が附きますまひヲ（角）氣が附ろぬからこそ己に詳しく話したのだが併し後で若し氣が附きはせぬかと氣遣はれる事があるヲ（小）夫は何う云ふ事柄です（角）實は己の疎匆だ初に彼の心を動かす爲にお梅が男姿で此巴里へ入込だと云ふ事を多舌たのだ（小）ヤア夫い大變だ老白狐とも云はれる位の男ですもの夫だけ聞けば直悟るよ極ッて居ます事に由ると貴方と話て居る中に悟たかも知れませぬ（角）己も爾う思ッて後で色々考へて見たがナニ己の居る中には確に未悟らなんだ悟ッたなら己が歸ッた後だ（角）就にしても今頃は最う疾くに悟ッて居るに相違ない左すれば彼れより先に廻り其穴を檢めお梅の死骸を堀出すが肝腎ですヲ（角）己も無論堀出さればならぬと思ッたが能々考へて見れば夫も中々容易の事でないから（小）だッて貴方此方から行て堀出さねばお梅の死骸が獨り出て來る筈はありませぬ（角）爾サ爾だけれど事に由ると鳥村がアノ樣な奴だから既に己の



心を察し內々穴の邊に見張ッてヲ己が穴へ這入ッたとき己を秘密黨の一員として捕へはせぬかと恐れるのだ（小）ナニ貴方其樣な事がありますものか（角）其樣な事がないにもしろ秘密黨の集會所へ近寄るは强盜の住家へ飛込むよりも猶ほ危い仕業で万一其筋の探偵と間違られるか左なくとも其黨の密事を聞知たと見認められるればお梅と同樣活埋にせられる者と覺悟せねばならぬ（小）でも貴方今其穴で秘密黨れ會議を開いて居る譯ではありますまひ（角）左樣サ何時開くか分らぬから若し折惡く丁度會議の時であつたら（小）其樣な事を言ては必ず鳥村に先を越れますよ今夜行きませう今夜（角）夫に未分らぬ事があるヲ穴には天井が落ぬ樣所々に土を堀穿し柱の樣に仕てある相だがお梅を埋たのは即ち其柱だと云ふ事だけれども何の柱だか分らぬので（小）夫はナニ中へ這入ば分りませう一切の道具は私しが殘らず用意して今夜穴の傍に待て居ますから貴方は李助を引連てお出なさい十時を相圖に湖南街と門吉取の角で逢ませう」と小根里が熱心に勸むるより角三も茲に再び決心し愈々お梅の死骸を堀出す事と

なし今夜の十時を時刻とし猶ほ細かき廉々を打合せし末小根里を返したり

## 第五十五回

栗山角三の用心深きに引替て老白狐鳥村槇四郎ハ最大膽の男なり角三の言葉に由り己れの身代となり活理にせられたるは我が尋ねるお梅なるを悟りてより一刻の猶豫もなく其夜直ち角燈を照して恐ろしき穴の中へ入込たり穴は奥まるゝ從ひて益々其所此所に堀殘しさる土の柱あり孰れの柱がお梅の死骸を包み居るや儘に角燈の明りにては充分の檢査も屆かず依て此夜は何の結果をも得ずして立返りしが此上ハ彼の自首して出たる秘密黨員長谷川某に問ふ外なしと直ち牢屋まで尋ね行きし所此頃政府の代目にて孰の司法官も我れ先ち功名手柄せんと爭へる折なれば早や此秘密黨事件を以て一世の名譽を擧ぐべき大裁判と思ひしと見え彼の長谷川を密獄に投じて何人にも面會を許さず鳥村は稍や失望せしも猶ほ警視總



監より特別の許を得ば面會すると難からじと思ひ更に穂内總監の邸に問ひしに穂内は此頃功成名遂て婚禮を想ふの際なれば夫が爲め出て交際社會に行きたる留守なり歸りの程も分らずとの事なれば最早や如何とも詮方なし長谷川に逢ふ事は當分出來ぬ者と斷念めて再び穴の中を檢むる事に決したり昨夜は心周章し際なれば孰れの柱なるか判じ得ざりしも今日落着きて檢めなば豈も分らぬ事はあらじと又も燈ぴおど用意して入込しも穴の中には晝夜の別なし日の目を見ざる常暗の境なれば物凄き事前よ異らず殆ど長居の出來がたき程なるを猶ほ勇を鼓し及ぶだけ檢めたれど孰れも同じ柱にして是かと認る所なし斯くなれば外ち工夫なく一々柱を堀顔し土を解きて探るに非ずば幾度來るも同じ事なり去ればとて己れ一人の力にて數ある柱を堀頽すと到底出來得る沙汰に非ず手下を使ふの外なけれど斯る大事を端なき者に打明るは極て危き次第なり誰よしせんか彼れにせんかと樣々案じ煩ひたる末終に下等探偵の一人にて田原と云へる力强き男あるを思ひ出し之を呼來りて酒を呑ませ徐々と我が大事を說き

事若し成らば年々六千法の給金にて生涯飼殺しになすべしと云ふよ此有難き御意を得て何か辭まん田原は大喜びに打喜び一人の力にてある丈の柱を殘ず堀頽んと云ひ早速夫々の道具を調へ來しかば槇四郎は念を推し「愈愈此柱と見込が附けば直に返ッて己に知せろ其時ハ己が一緒に行くから」とて田原を一人出し遣れり田原は素より島村に見込るゝ程の男なれば今までとても島村の言附くる事とてハ一たびも背きたるとおく如何ほど夏蠅き仕事にても必死になりて仕遂るを自慢とせり島村ハ先づ一廉は安心し是よりハ唯田原よりの便り如何と夫のみを待居たるよ翌日の午後に至り田原はグランヅ街の妾宅へ尋ね來れり島村は先に栗山角三を通した る一室に彼れを通し「何うだ分ッたかと問ふに彼れ何時よなく顏を蹙め「長官先づ一杯お呑せおさい胸が惡くて話も出來ません」と答ふ何故に胸が惡きや知ざれど彼れが一杯呑せと云ふ其口振の鋭きハ何か結果を得し爲ならんと島村は早速上等銘酒の口を拔き一杯を酌ぐに彼れ一息に呑乾て「ア丶是れだ〳〵是でヤッと話が出來ますモシ長官（島）イヤ茲でハ長官と言て呉れるな役所向の言葉は耳に立つ（原）ジャア何と云ひませう島村ハ笑ながら「爾サ旦那とでも云ッて呉れ（原）ジャア旦那胸も惡くなるだらうじやありませんか斯言う譯です（島）フム死骸を堀出したと云のじやあ（原）堀出したにも何も昨日から今日まで七つ堀出しました（島）エ七つエ七つ（原）夫も斯でサア何でも取附の柱から順に頽すが好らうと第一ハ先づ一番前の方にある一本を頽しますとイヤハ濕ッぽい樣な土臭いやうな臭氣がする必條死骸があるのだなと益々深く堀ますと鍬の先にコッと當ッたのは土ぶまれの髑髏です何でも七八年も前に埋ム者と思はれるから是でいないと直ハ土をうぶせ次へ〳〵と堀て行くと二本目三本目皆同じ樣な骨がありますけれども奥へ行くだけ段々ハ其骨の新しい所を見ると何でも彼奴等は矢張り戸の口から段々奥の方へ埋て行た者と見ます奥へ行くだけ死骸が新しくなるには少し氣持が惡くあり寧ろ二三本飛して堀て見やうかとも思ひましたがイヤ茲が辛抱だと今朝又早く起き今まで掛ッて到頭七本堀盡しましたが七本目でハ實に逃出し度くなりました（島）夫

れで七本とも皆死骸があつたのか（原）ハイ皆なありました其中よも七本目い何うでせう未だ新しいから一鍬堀る度にプン〳〵と臭氣が來ます夫を我慢して一時間も堀ると臭氣は益々甚だしく殊に其土が濕ッて居て何となく鍬が粘る夫を又三鍬ばかり堀とスル〳〵と鍬に掛る者があるから摘で見ると囊の紐です囊の事を貴方から聞て居るから徐々と四邊の土を退けて見るとズックの囊が腐さなりに所々未形を存じて居ます土を退け盡し鍬に掛けて引出すとコロ〳〵と轉り出て私しの足の上へグザリと落たが其氣味の惡い事でも茲が大事だと私しい角燈を取り其心を搔立て能く見ますと何うですウヨ虫がヅロ〳〵と這て居ます夫も好として囊を最一度轉すと今度は死人の顏がヌッと出ましたアヽ今思ッても身震がする目の所へ炭團の樣な大きな穴があき唇が流をて白い齒を露出て居る其恐ろしサ」と云ひ來るを流石の鳥村も聞くに堪へずやありけん「最う其後は言ふて呉れるな（原）ハイ私しも最う能う言ひません（鳥）夫で止めて歸ッたのだな（原）ハイ止めて歸りましたが是で最う分りましゝ貴方の目指す大事の死骸は直此次に在る八本目の柱です今夜一緒に行て堀ませう」鳥村も此話よ心鈍り暫し氣持の惡き顏をして默然と控へ居たるが今夜最一度との言葉に勵まされ一杯のブランを呑乾し「好し行ふ（原）最ふ八本目は左ほど酷い事へありません二月か三月前の死骸なら爾う恐しくへなつて居ますまひ（鳥）幾等恐しく成て居ても仕方がない（原）爾ですとも是まで遣て止ると云ふ事へありませんから（鳥）爾サ併し今夜の何時に仕樣（原）私しは九時に行きますから貴方は九時半に入ッしやい（鳥）好し〳〵九時半と二人へ茲に約束を定めたりアヽ活地獄



## 第五十六回

目指す所へ門苫取の岡よ在り岡の下なる穴に在りアヽ哀れむべし烈女お梅前よは賤き國事探偵と間違へられ聞くも恐ろしき活埋の無慘に逢ひ今は又惡人共より其死骸を堀出されんとすお梅何の罪あるや

鳥村槇四郎へ其手下原田と共に夜の九時より堀初めんと云ひ栗山角三は

下僕李助及び探偵小根里と共に十時より取掛らんと云ひ僅に一時間の違ひ終に鳥村の勝となるべきや否や森々として風肅々たり聖ユウスタシュとて巴里の中央に在る寺の時計今や夜の十時を報じ了りぬ鳥村は今穴の奥より堀返へしに忙がしかるべく栗山角三は穴の入口にて小根里と相談中なるべし此二個が事は暫く置き梶條健兒が爲を思ひ此二個を敵として今まで大膽に戰ひ居たる町川友介は如何よせしや彼れ自ら秘密黨の一員にして手づからお梅を埋めながら今猶ほお梅の在家を悟り得ざるか彼れ何故に遲疑せるや彼れ實は遲疑せるに非ず彼れは今上田銀行の事務室に在り其頭取榮三と共に頻に何事をか相談せり見廻せば此室の隅に當りて二個の鍬と二個の松明とを置きたり銀行頭取の事務室に斯る品物を見るは今が初めてなるべし頭取は日頃よりも猶ほ打鬱ぎたる顏にて手を組み首を垂るゝのみ町川は毎の如く肥たる顏より溢るゝほどの笑を浮め且つは是より何か大事を初めんとする如く眼に充分ある決心を現はせり此二人何事を相談せるや町川は榮三の顏を見詰め其返事を待つ樣子ありしが



待兼てか手の掌にて卓子を輕く叩き「サア何うだ君考へてばかり居ては果しがない今までは此上もない決心の早き男だッたが何うして此う遲疑する樣になつた」榮三は漸く顏を上げたり其色の青き事宛も土の如くなるは此頃の心配に衰へたる者なるか將今一時に心を騷す事ありて面にまで現はれし者なるか頓て徐々と聲を發し「では行く方が利益だらうチ(町)利益其樣な手弛い事を言ては仕方がない柳條の爲めを思へバイヤサ君の爲を思へば何うしても行かねば成らぬ利益の不利益のと云ふ氣の永い話しでいない」榮三は氣のなき顏にて「イヤ僕の爲となら僕は斷らう行には及ばぬ(町)又其樣な事を言ふ君の爲でおく瀨涙雛の爲じやアおいか雛の幸福は全く此一擧に繫かると云ふものだ(榮)ナニ必ず雛の幸福とは云はれぬテ成るほど此一擧が旨く行けば二百万法の身代が柳條の物になりは仕やうが夫は唯だ金持になると云ふ丈の事で夫が幸福か不幸か未だ分らぬ(町)君い何時になくルーソーの樣な理窟ばかり唱へて居るから困る柳條が一文なしよ雛と婚禮すれば二人は何うなると思ふか(榮)二人とも働くのサ

僕い最う嬢の決心も聞てある嬢の母は僕と共よ汗水になッて働き一人前の身代を作上げた女だのら其事を話て聞せたら嬢も母の樣よ行ッと共に働き度いと云ふ事だ（町）イヤ働くと云ふ決心はあるだらうよ[illegible]

滿中佐の遺產二百万法が柳條の手に落ち働かずして此世が立派に送られる樣よあれバ此上の事いないと云ふ者だらう（榮）でも成るべくは自分で苦勞して稼ぎ溜た身代が尙いのだ（町）コレサコレ上田君何故其樣な分ら ぬ事を言はるゝの是から二人が働いて身代を作り其の上世帶を持つなどとい今日云ふべき事じやあい柳條が牢に入てから嬢の顏の疲さのが君の目にい附かぬのか此上苦勞を掛けて見給へ嬢は死で仕舞ふかも知れぬぜ」と親子の情に訴ふれバ流石に繫る恩愛は榮三の心を動かしけん深き溜息を吐きながら「ウムー夫い爾だ實に爾だ」町川は茲ぞと附入り「夫のみか君が今まで陸水を垂して築上ゆた此銀行の身代も既に頽る期限が見えて居るではないの今日はコレ九月の九日だぜ馬平侯爵よ返金する期限が明後日じやないか其金を返して仕舞へバ閉店する外はあるまい（榮）イヤ返濟の



金だけは最う揃へてあるから明後日拂ひ返して閉店する丈の事だ（町）明後日返すとて明日其金に手を附ければならぬぜハブル港の得意先から催促が來て居ると先刻も話したじやないか（榮）イヤ夫は來る廿五日まで待て貰ふ樣に今ー方手紙を出して置た得意先とい云ふ者の永年取引する行だから待たぬとい云はぬ必ず待て呉れるだらう（町）好んば待て呉るにした所が二十五日に到り何を以て其拂ひをする其時に至ッて矢張り耻かしい思ひをするに極ッて居る夫より今金滿中佐の遺言を探し出て見給へ柳條健兒は君の組合人であり君の婿夫であり其婿夫が二百万以上の身代を得ると云ふ事が世間に分れば幾等でも融通の道はある今之を探さねば坐して自滅を待つばかりだ（榮）夫い爾だ成るほど我婿夫として見れば其婿夫の物となる遺言書を探すは務めかも知れぬが僕い今思ふても氣持が惡い自分で夫を堀出に行く氣はない之れは全体柳條が自身ですべき事柄だらう（町）勿論自身でするべき事柄サけれども柳條い牢に這入て居るから仕方がない其友達たる僕や養父たる君が代ッて仕て遣るが當然だらう

（榮）牢に這入ては居る者の筈と聞、糺して見れば未秘密黨連類の件は其筋ても證據が上らず唯獨逸士官と決鬪の件だけだから遠からず無罪にある愈々無罪になつた上彼れが自身で取出すだらうと思ふから僕ハ何も其代りを務めて遣るに及ばぬと云ふのサ」此話しにて見る時ハ町川は島村や栗山と同じく金滿中佐の遺言書を堀出さんと思へるなり思ひて榮三に勸むれども榮三ハ心進まず柳條の牢より出來るを待ち彼れがなすに任せんと思へるよ似たり榮三が斯く言ふも其身に取りては無理もあし去れど町川は之よ屈せず「成るほど柳條ハ近々の内許されるかも知れぬが許されたる所で仕方があいよ其前に島村の方て手を廻し遺言書を取て仕舞ふからエ爾じやないか柳條が牢から出ぬ前に遺言書は既に燒かれて仕舞ふぜ何うだ君僕の考へでハ今夜にも既に島村等に先を越れるかも知れぬと思ふのだと町川ハ益々熱心に說立たり若し此二人よ向ひ今夜既に島村が九時栗山が十時に行きたる事を知さば如何ほどか驚くならん



## 第五十七回

上田榮三は秘密黨の主領とも推るゝだけに素より決然たる一男子なるに今は何故友人町川の熱心よ引替へ心迷ひて決せざるや彼れ殺せしと思ひたる老白狐の猶生存へるを見其身代に罪もあき者を殺せしと氣付てより後悔の念止み難く其時若し柳條健兒の言し如く遺を解きて其顏を檢めたらんにハ斯る過ちもあるまじきにと只管我身の罪深きを感じ殊に又此頃よ至り其身代の實はお梅なる事を聞きてよりハ万恨胸に迫りて殆ど身を安ずるに所なきまで深く悔ひ深く悲しみ今はお梅の名を聞くさへ腸を斷つ想をなすあり罪滅しの道とあらは如何なる事をも厭ハねど更に又手を下してお梅の死骸を發かんとは忍びざる所ならん去れば町川が迫込みて「柳條の許される前に島村が遺言書を奪ハゝ如何に」と問詰れど榮三は猶進まず「島村ハ未お梅の事を知る筈がないテ」と答へたり町川は短き首を突出して「君の樣に悟りが悪くては困るよ既に我黨員の長谷川と云ふ奴が老白

狐の許へ自首して出たと僕が探って注進したてはないか長谷川はアノ夜老白狐を捕縛に行た一人だぜ夫で老白狐と鳥村と同人だと云ふ事も既に君の知る通りサ而見れば鳥村は我身代に立た者が蠱の儘で穴の奥へ埋られた事を充分よ知て居るのだと理を推して説分れば桑三も暫がほど答に窮する樣子なりしが稍ありて成るほど夫は知ても居やうが其身代がお梅だと云ふ事は未知るまひ（町）ソレ又しても其樣な事を云ふ夫を鳥村が知なくて何とする君能く考へ給へ鳥村が兼女を呼寄る爲よ柳條の名を騙ッて手紙を出し湖南街十三番地へ尋ねて來いと云て遣た事は既よ確な證據があるぜ自分が呼寄せたのに來らぬから夫で今までも怪んで態々ゴヘ出掛て行たり樣々に骨折て居たと云ふ者所が長谷川から實い是々と聞たから扨いお梅が己の身代よ立たかと直に氣の附く筈でいないか況て君鳥村い此頃巡視總監直轄の探偵で佛國第一等と云はれて居る男だもの是くらゐの事が分らなくて何としやう彼れ必ずお梅が我が代に捕へられ蠱の儘よ運び去れて」と滔々辨じ去らんとすれば桑三はお梅の最後を聞く



さへも厭ふ如く顏を蹙めて「イヤ其後は言給ふな分ッた〳〵（町）夫見た事か分ッたゝらう既に分ッたとして見れば最早や異存もない筈だ此儘捨て置けば金滿中佐の遺産を鳥村に取れて仕舞ひ正當の相續人たる柳條健兒い一文も取る事が出來ぬ夫を知ながら默ッて居るは友達の情に負くのみか鳥村い惡事を手傳ふも同じ事で罪の上に罪を塗ると云ふものだ事を分たる言分に桑三も全く説伏られし如く突と立て卓子を離れ二三回室の中を歩みしが突然又町川の前に留り「何うしてもお梅の死骸を堀出ねば成らぬのかナア己を恨で齒を食〆て死で居るだらうか其死顏を見ねばならぬ事になると言差て嘆息せり流石の町川も其心中を察しては密に涙の推來るを覺ふ去れど心弱くては叶はぬ塲合と空嘯いて控ゆるは泣よりも尙辛からん桑三は又一回して立留り「アヽ何うしても己の罪だ柳條がアレほど言爭ふたのよ聞入れず彼れを攫み出させて其後で直に埋めて仕舞へと己が命じた今は其報が來たのだアヽ仕方がない」と壁を出して打嘆く其額を見上れば前額に玉の汗を流せり町川い又も桑三の心を引立んと上田

君實に是が天の配劑だ罪なき者を殺した罪で此樣な事よおッて來たけれど人違ひと知て埋めた譯ではなく全くお梅の運が惡いのだ君も先日來打蔑れて居る所へ必ず後悔の念に迫られるからで有たらう是ほど後悔すれば君の罪も大方へ亡びたと云ッても好い唯此上の功德にはお梅の望みだけも滿足させて遣るが好らう一旦殺しさ者を今更ら生返すと云ふ事は出來ぬど切ては其生前の望みだけも叶へて遣るが時に取ての追善と云ふ者だ先づ氣を鎭めて考へたまへお梅へ唯だ遺言書を柳條へ渡し度い一心で此巴里へ遣て來さのだ死でも遺言書が柳條の手よ入ぬうちは其亡魂が安心せぬお梅の死骸に若し聲があらば君に向ッて早く此遺言書を堀出して呉れ早く柳條に渡して呉れと叫ぶだらう夫でも猶ほ君が堀出すは否だと云へば君はお梅を殺したばかりでなく其亡魂まで苦めると云ふ者だ迫ては亡魂だけも救ふて遣る心は無いか」と充分よ榮三の弱味を攻れば榮三も初めて茲に奮發し手を差延て町川の手先を握り「町川君實に能く云ふて呉れた成るほど其遺言書を堀出して柳條に渡すのが唯一つて罪亡ぼしだ



夫を僕が否と云ふては罪の上に罪を塗るのだサア行ふ來たまへと今までとい打て變れり町川痛く喜びて「夫であろ僕の言甲斐もあるナニ穴の中へ這入ば何も彼も僕一人で遣り決して君にお梅の顏は見せぬ鍬を二挺用意したのも君に堀せる爲でいなく若し一挺が折た時の掛替だ万一穴の中で烏村に出會すかも知ぬから君は其時の用意に唯見張番を仕て呉れゝば好い是も用心だから短銃を持て行きたまへ僕は既に腰の邊に二挺の短銃を附けて居るサア來たまへと打連れて二人は銀行を忍び出たり

## 第五十八回

宵の程より降しきり吹しきる雨風は纔に罷みたれど空一面よ塞ぎたる黑雲は猶ほ散ぜず暗い綾なく黑幕を張しに似たり茲は門苫取の岡の下なり枝茂り葉鎖したる物蔭より露けき草樹を推分て一人の男現れ出たり暗に隙まて此方彼方を見廻しながら「ハテお今丁度十時を打たが最う來さうな者だと云ふい是なん探偵小根里よて今宵の十時を合圖とし栗山角三を待

つ者あらん斯る折しも小半町先の方よ星の如く光るゝ角燈あり「アレだ〳〵此樣な仕事をするに角燈など點て來る長官も大分ヤキが廻ッたワヘ穴の中へ入る迄は故々燈明を消す所だのに」と云ふうち角燈は吹消す如く影を隱せり感心〳〵彼所まで來て吹消した成るほど今來ぞと此已へ知せる爲よ燈明を提て居たのか」と呟き又も首を若延て透し見るよ淋々と二人の人影既に四五間先まで來りしに似たり彼方も均しく此方の姿を認めしか遽憚かる忍び聲よて「同僚」かと云ふ聲は確かよ角三なり「時間を違へず能く入しッた」と答ふれば「生涯の大事件よ時間を間違へてある者か」と言ひながら角三は李助を從へて進み寄れり(小)何うです此天氣はエ旦那跳へても斯は行きませんせ今までは雨風で往來も悉皆停ッて仕舞ひ誰に見附ると云ふ心配はなく尤も木の陰で半時間ほど待て居たは辛かッたけれど此樣な仕事よは持て來です(角)持て來いの天氣かも知れぬが今の雨でビッしよりだ明日は風引ねば好がと思ッて居る夫にレウマチも起り相で最う既に骨が痛いテ(小)ナニ旦那穴の中へ這入れば温かよありますよ(角)お前ハ



最う中まで這入たか(小)一人では小氣味が惡く奥までは行ませんが入口だけは檢めましよナニ最う案内は悉皆分ッて居ます」角三は顏の軍を拭ひながら道具の用意は好だらうな(小)夫ハ最う言まてもありません鍬が三挺に松明が三個穴の中の廊下とも云ふべき所へ置てあります其外に未角燈も一つありますから奥までハ角燈の明で進み愈々仕事に取掛ると云ふ時よ松明を照します(角)夫は有難い已も李助も短銃を持て來たから万一老白狐よ出會しても大丈夫だと日頃の臆病に似氣もなく最大膽ある言を吐けり(小)ナニ老白狐が此樣な夜に出て來ます者か彼奴必ず添田夫人を相手にしてヂヤメイカのラム酒か古製のコグナックを呑で居ませう彼奴ハ最う此上もない無性者ですから月の澄た夜でなければ此樣な所へ出て來ません(角)夫にしても用心よ如くハないだ兎も角も先づ進まうではないか」此命令に從ッて小根里は先よ立ち李助最後に續きて進み初しが凡そ三十歩ばかりにして穴の入口に達せり小根里ハ兼て此所に卸しある角燈を取上て「コレが穴の口です見た所は狹いけれど奥は段々と廣がります」と

云ひ猶ほ四邊に並ある蹴と松明とを取上て銘々に手渡しつ「サア」と聲掛けて穴に入る角三は溝氣味惡く小根里の外被の裳よ取縋り身を屈めて從へば後より杢助も無言にて續き來る穴い暫しがほど一歩〳〵に狹くなる樣子よて先に立る小根里の角燈のみよてい足許さへ見る能いず或時は下たる石に躓き或時は天井にて頭を打ちなど一方ならぬ難儀を冒せど慾に滿たる三人い事ともせず小根里い後を照さんとの用意あるか角燈を背に廻し一歩行きては行手を透し二歩行きては向ふを眺め用心更よ弛みなければ奥の知れざる穴の中なれば殆ど呎尺を辨ずべからず探り〳〵て道を知るのを頓て一町餘も歩みしかと思ふ頃漸く廣き所よ出しかば小根里は初めて足を留め「サア最う譯はあい玆で松明を附けませう」と云ひつゝ其身を引延しよ不思儀や遙か奥の方よて薄明るく燒上る火の陰あり小根里ハ驚きて縮み上り「サア大變だ旦那老白狐が早や先に廻ッて居ます此警報に角三も同じく驚き彼方を佶と眺むれば屈强なる二人の男四邊に四個の松明を置き燒上る其火に照し必死となりて一の土柱を堀崩せり餘りの事に聲

さへ出ず最後に控ゆる李勁は一番熱心薄けれど「何だ馬鹿〳〵しい歸りませう〳〵」と云ふ角三は初て人心よ近りし如く「エ殘念だ己の實を竊んで居るアレ〳〵早や七八本の柱を倒して殘る一本へ掛ッたからアノ柱に相違ない此樣な事と知たならお梅が男姿で來た事を彼奴に知せるではないかッたのにと殆ど泣出さんばかりなり今まで及ぶだけの手を盡し漸く目的の達せんとする間際よ推寄せて此有樣を見る失望のほど想ひ遣るべし小根里も暫しがほどは云ふべき言葉さへ知ざりしが忽ち何事をか思ひ附きけん「旦那〳〵」と微る如き聲を出して是が返ッて我々の幸ひです燈を消して彼等の背後へ忍び寄りアノ堀仆した柱の影から彼等の堀終るのを待て居ませう夫で彼等が遺言書を取出した所で彼等二人を射殺せば手を勞せずして遺言書は我々の者でせう」角三は日頃より人を射殺すなど左る亂暴い聞くさへも身震する臆病人なれど斯る時にい非常の勇氣ある者と見え「夫が好い〳〵彼等の背後へ忍び寄り愈々堀出した所で射殺して遺らふ」と云へり是にて相談一決し三人い横手に廻り徐々と彼等の背後へ忍び寄れり



## 第五十九回

角三、李勁、小根里等が困難を極めて探行きたる穴の路も町川友介上田桑三の兩人には左まで困難ならず兩人は幾度も此邊を徘徊し幾度も此穴よ入りたれば知人の家よ行くが如し路は斯く知りたれど桑三は穴の傍に近くに從ひ心益々重きを覺ふ今までは我主義の爲め我黨派の利益の爲には人を殺すも止を得ずと思ひたる男なれどお梅を殺せしを知りてよりは心に深き疑ひを生じ假令ひ主義の爲にもせよ又黨派の爲にもせよ我と同等の生靈を殺して差支なきや我れ人を殺して善しとあらば人も亦我を殺して善と云はん我命と人の命と如何ある輕重やあると桑三は歩みながらも唯斯る事を考ふるのみ歩みては考へ考へては歩み漸く穴の間近よ達せし頃は「主義の爲にもせよ辨解せしめずして人を判決するは惡し」と思ひ定めたる頃より若し桑三唯一人なりせば必ず斯く悟りて穴の口より引返す所あらん去れど桑三が傍には熱心なる町川あり町川は固より彼夜の事には與

りしも己れ自ら鍬を取り己れ自ら土を堀たるにあらねば其心も最輕く殊には今とおりてお梅の霊を慰むるは唯だ其亡骸を堀出し彼の遺言書を柳條健兒に與ふるの一方あるのみと確く思ひ詰めに由り今夜の事は飽まで善根功徳と信じ榮三を説きて止ず此時夜は早や十一時を少し過たれば穴の中なる烏村組と栗山組とは如何ある事を爲したるや最氣遣はしき限りなれど兩人は固より角とは知らず「上田君松明を照すなら茲等で火を附けるが好からうが僕の考へでは愈々仕事に取掛るまで松明にも及ぶまひ此穴へ這入るのは我家の穴倉へ入るよりも慣て居るので僕が先に立て榮丙しやう君も暗いのを我慢したまへ」榮三は唯だ一言「爾だ」と答ふるのみ「夫に又穴の中には蝙蝠の外毒獸惡蛇が居るではおし若し居るならば老白狐だから燈明のない方が結局用心が好いだらう」榮三は宛も機械の如く無言にて從ひ行くのみ頓て町川は彼夜己れが柳條と共に見張番に置かれたる所に着きしが何事にか驚きて立留り「オヤ〳〵變だ之は變だ此邊の雜草が折て居る丁度誰かゝ掻分たと云ふ具合にハテな我々より先に這入て行た



奴があるに違ひないと訝れば榮三は氣にも留ず「我黨員の誰かだらう」と答ふ（町）ナニ我黨員が何うして茲へ來る者か左なきだに其筋の詮議が嚴くなるべく嫌疑を避けやうと務て居る折柄だもの大首領たる君が召集令を發せぬ限りは誰も茲へ來る事じやない何でも是は老白狐だぜ彼れが我々の先を越し此穴に這て居るのだ老白狐の名を聞きて榮三は宛も生れ代りし如く益々面白い早く行う茲で想像するよりも這入て見れば分る事だ老白狐に出會すは望む所サ（町）サア爾來なくては了ないヲ爾云てゐそ吾黨の首領だ併し君老白狐を何うする氣か（榮）此鍬で叩き殺す今も考へて見るにお梅を殺したのゝ吾々だけれど吾々にお梅を殺させたのは老白狐だ（町）爾とも〳〵吾々は全く老白狐を殺す積で更にお梅を殺す氣はおかゝたもの（榮）夫のみならずサ老白狐が柳條の名を騙りお梅を欺き寄せたればあそお梅が彼れの身代にせられたる事とあつたのだ老白狐が其樣な惡計を謀まねばお梅が殺される所でない（町）説得て妙だから今彼の大金を老白狐の手に入れぬ樣にし彼れを失望させるのはお梅の仇を復す一端に

もなると云ふ者（榮）サア行う（町）サア行う心を揃へて歩み出せば暗き穴の道も足を沮むに足らず辿り〳〵て早やくも廣場の所に出たり此時老白狐が燈したる四個の松明は益々焚盛り暗き所を歩み來たる二人が目には殆ど活畫を見る想ひあり老白狐が一人の手下と共に必死となりて堀頽す有樣は手に取るよりも近く見ゆ何うだ吾々の推量した通りだ（榮）成るほど手下と共に堀て居るな悪黨め（町）併しアノ手下は何者だらう（榮）何でも彼と同じ悪黨サ（町）ヤ、最う柱を半分ほど頽しゃゼ（榮）爾だ最う少しで頽て仕まう夫に見給へ手近の柱から段々頽て行たと見え幾本も潰れて居るワ（町）成るほど是は驚いた今まで幾度も來たと見える一夜で是だけの柱を掘仆す事は出來ぬから（榮）爾々堀て〳〵到頭本統の柱を堀當たのだ今堀て居るのが確アノ柱だ子（町）アレだ確にアレだ二人は暫しがほど只呆れて續く言葉もおかりしが町川先づ口を開き殺して仕まはふ（榮）勿論サ併し何うして殺すが好いか短銃では遠過るから狙が外れるかも知れぬ（町）彼等の背後へ忍び寄り此鍬を腦天へ植て遣う（榮）夫が好いけれど



も待たまへ餘程氣を附けて忍び寄らんと若し彼等に悟られてアノ松明を消されると夫までだぜ（町）ナニ大丈夫此廣場の緣に傍ひアノ掘仆してある一方の柱の背後へ出るのサ緣の方は眞暗だから平氣な者だ〕と町川は指さして示しあがら又愕然と打驚ろき〔ヤ是は益々驚くべしだアレアノ隅の暗ひ所を見給へ彼所に少し光る者があるアレを何だと思ふ（榮）あるほど有るワ何だらうハテあ濡た所へ松明が反射するのじやないかな（町）ナニさうでないアレは確に角燈だ角燈の口を塞いで光の洩ぬ樣にしてあるのだ若實に驚くべしではないか〕ア、此二人は何を認めて斯驚くにや

## ●第六十回

上田町川兩人が、認めたるは確かに角燈の光なり四個の松明焚盛る傍らに何用ありて薄暗き角燈を揭げたるや榮三は合點行きし如く〔フム彼れは二人が携げて來た角燈だ仕事が濟めば松明を消し又アノ角燈を照して歸るのだ（町）イヤ爾でないよアノ角燈の動く事を見給へ誰かゝ立て角燈を揭

げて居るのだ」云ふ中よも角燈は徐々と動きて次第に鳥村等の背後の方に寄る如く見ゆるにと(榮)成るほど爾だ人が提て居るに違ひない且逆彼等の手下とも思はれぬが誰だらう(町)爾サ手下ではない手下なら是ほど骨の折れる仕事を彷徨して居る筈がないから(榮)左ればとて彼等の敵でもあるまいし敵と云へる言語に町川は忽ち思ひ附く事あり敵だ〳〵彼等の敵に違ひない(榮)でも敵とは誰の事だ(町)毎も僕が話した栗山角三の事さ彼奴も鳥村と同じく彼の遺言書を捜して居たから終にお梅の事から此の穴の秘密までも探り出し今夜必ず鳥村と同じ目的で茲へ來たのだ(榮)だッて彼奴國事探偵ではなし鳥村の樣に我黨の秘密や此穴の事を知る筈がない(町)イヤ自分に關係のない遺言書の事まで當人の柳條より先に知る位の男だから何うして聞知ッたかも知れぬ夫に又事に寄ると鳥村の後を尾けて知らず〳〵此穴まで從て來て夫で秘密を知ッたかも知れぬと云ふ者サ爾だ爾だアノ通り幾個も柱を堀倒してある所を見れば鳥村が今まで幾度も茲へ來たから必と其時に後を尾け夫で今夜は宵の中に痛い雨風で



あつたから此樣な時あら鳥村が來て居ないだらうと扳掛の功名をする積りで遣て來た所ろ矢張り鳥村が來て居たから止を得ず其背後に佇立で居るのだ(榮)シテ見ると矢張り吾々と同じく鳥村を殺す積かな(町)無論爾だらう見たまへアノ燈が次第〳〵に柱の傍へ寄て行く事(榮)併し栗山と云ふのは一人で鳥村と其手下とを相手にして戰はうと云ふ樣な大膽な男かチ(町)イヤ夫ほどの勇氣はあるまいが何でも自分一人ではなく矢張り手下を連れて居るだらう」とて又も其方を眺むるうち次第に柱に近くに從ひ松明の遠明りにて三人の姿有無の中に現れ來れり(町)ソレ見給へ彼れ一人ではないアヽ爾だ後先に居るのが彼れの手下で彼れは異中に居るのだアノ背の低い奴が必ず彼れだ(榮)併し不思議だなア愈々鳥村を殺す積りなら何もアノ樣にグヅ〳〵する筈はなく直に其背から三人で飛附相な者だが(町)イヤ其樣な大膽な事はせぬ彼奴中々の狡猾者だから察するに鳥村等が仕事の終るのを待て居るのだ愈々遺言書を取出した所で殺して仕まへば直に其遺言書を引後つて立去る事が出來るから(榮)成るほど卑

怯な奴等だヲヘ（町）夫に彼奴等は何でも短銃を持て居るよ鉄で頭を叩き割るは險呑だがらァノ頽れて居る二本目の柱の影から合圖を揃へて短銃で射る積りだ（榮）成るほど爾の樣だ併し爾なれば我々は少し困るじやないか（町）ナニ困る者か其後で又角三等を殺して仕まへば能い詰り三組とも同じ目的を以て茲へ來て一番後れて着た吾々が第一の利益を得るのだ（榮）併し夫は二重の人殺しと云ふ者だ（町）ナニ搏う者か老白狐の烏村を殺すのも栗山角三の連中を殺すのも同じ事だ（榮）イヤ大違ひだ老白狐は吾々に對して一方あらぬ惡事を働いて居るのみならず現にお梅を誘き寄せて活埋にせられる樣な場合にしたのも彼れだけれど栗山は我々に對し夫ほどの惡事を働いた事はないもの（町）ナニ君柳條健兒の財産を百万法だけ掠めようと云ふのだもの其憎むべきは同じ事だ（榮）イヤ大に違ふ僕は何うも栗山を殺す事は出來ぬ（町）君が厭なら僕が殺すナニ不意を打ば一人で三人を相手にするは易い事だ夫で若し僕が危くなつた時には君助て呉れるだらう（榮）君が危くなれば夫は助けるとも我が友人の危難を救

ふのは人たる者の義務だもの（町）好し〳〵万一の時に功けて呉れさへすれば僕は安心して彼等と戰ふ（樂）でも何うして戰ふ積りか（町）茲で待伏して居るのサ茲なら尤も場所も能く彼等の仕事が悉く見えるから彼等が其目的を達して歸り行く所を横合から出て遮附るサ外に道がないから此出口を通らぬ譯に行かぬ」と二人が問答する間に烏村等は益々仕事を進ばせ早や彼の柱に大なる穴を開たり最早や甕の死骸を引出すに好らんと思ひしかば烏村は鍬を置き自ら穴の中に其頭を突入たり角三等は今あろと思ひし如く三人齊しく柱の傍まで進み出短銃を差出し大方狙ひを定めたれど烏村再び首を退き「猶だ〳〵」と云ふ如き身振して又も塀頽しを初めたれば角三も今殺すは猶早しと思ひしか短銃を下げ徐々と身を隱せり（町）何うだ君芝居でも此樣な見物はないよ（樂）イヤ無駄口を云ふ内に最う大方アノ柱を頽して仕まつたアレ角三等が又一歩進み出た」實に此時の有樣は繪に描くも畫き難し烏村は再び手下と共に鍬を置き穴の中を撿めんとす角三は何時でも烏村等に認られ次第敵が我を襲ふべき暇なき間に我よ



り敵を射留んと油斷なく短銃を握り詰む實に一髮千斤を釣るの時なり壓三も友介も殆ど息を凝せしが此危き瞬間に當りて

## ●第六十一回

此危き瞬間に當りて忽ち百雷の天を破りて落來るかと思はるゝ程の響を聞く此響は何の音ぞ角三等三人が筒口を揃へて發したる短銃の聲なるか然々三人は時猶は早しと思ひて未だ發たざるに此聲は何の響ぞ是如あらず烏村槇四郎が其手下に命じて今まで七本の柱を塀頽させし上今また殘る一本を塀頽したれば土の天井は其重さに堪へずして一時に頽れ落んとするなり斯くと見て一同齊しく打驚き烏村も立ち田原も立ち角三も立ち杢助も立ち小根里も立ちたり此五人は皆己等の目的をも打忘れ鍬を捨て短銃を捨て立上りたれど噫事既に遲し柱を失ひて落來る土天井は留むるに由なきありアッと見る間に彼等は既に其下に埋られたり今まで狀盛りたる松明も彼等と齊しく埋められ四邊は眞暗の闇となりぬ固より

天井の一部なりとは云へ此五人を叩き伏せて活埋にするほどの土なれば其重さも一方あらぬと見え落來りたる勢ひは最凄じく地盤は宛ながら地震の如く響き渡れり去れば彼等五人は目鼻も手足も悉く叩き潰されて埋められしならん此方に立る榮三友介の兩人は幸ひに此難を免れしかど一時は自ら埋られしかと訝るほどにて地面の響に其身体を支へ兼傍の壁に寄れ掛れり(町)上田君(榮)「町川君」と互に合答ふれど顔は見えず(町)恐しい者だナア(榮)是は天の裁判だらう(町)五人共よ埋られて仕舞ッてサ(榮)此勢ひでは埋まる前に身体がすッ斷〳〵に潰れたゝらう(町)何うしたら好だらう(榮)最う何うも仕方がない是が天の裁判だ」と云ふ聲さへも震へた り實に是れ天の裁判實に是れ仕方なきあり五人の命茲に全く盡きしのみか上田榮三は目的も亦全く消え失せたり今までお梅の死骸と共に埋もれる遺言書も一時間の中に手に入るべしと思ひたれど斯くありて千万年待ちたりとも手に入るべき道あきあり遺言書は幾人の命と共に門苫取の岡の下に埋られ終りたり最早や一人の力にて堀返すべき樣もあし若し是



を掘返さんには數千人數万人の人足を備ひ岡の全体を堀頽す外なきあり町川は暗の中より聲を發し仕方がないと云ッても君アノ遺言書は(榮)遺言書は最う斷念する外あいではあいか此穴の奥の方が潰たからは人間の力で取出す事は到底出來ぬ(町)出來ぬと云ッても惜いものだ(榮)惜くても仕方がない深入をせず命だけ助ッたが未しもの幸だ(町)夫は爾だけれど實に困ッたあア(榮)イヤ是が天の裁判僕の身に運があいのだ卵もないお梅を殺し今其死骸から遺言書を取出して我身代を肥さうとは天が許さぬ僕は結局是で未練が殘らぬから好い(町)でも銀行の結局は何うして附ける(榮)夫は又考へて見れば分らぬけれど元々僕の失策から出た事もあ僕は我身に着て居る物を剝で迄も辨濟の出來る丈は辨濟し一旦は乞食になつて更に稼ぎ出す外はないと云ふ當人は暗に隱れて姿更に見えざれど顔よ必ず失望の色を現せるあらん町川は唯一人殘念がれども今更及ぶ事あらねば「噫、失望噫失望」と幾度か叫びたり今一歩と云ふ間際まで漕つけて此有樣を見る實に失望も無理あらず二人は斯く嘆くうちに殘る響は漸く

消えしかど二人が立てる邊へは次第〳〵に土烟の廣がり來り今は呼吸さへも出來難き迄に到りしかば(榮)何時まで居ても同じ事だ出て行う(町)何うも仕方がない」此一語を名殘として二人は探り〳〵て漸くに穴を出たり穴の中の凄じき響も外までは激しく達せざりしと見え騒き騒ぐ人もなし二人は最不愉快の想ひにて言葉を交す氣もせざれば無言の儘に穴より三町ほど歩み去り無言の儘に右左に立分れ重き足を引ながら各々我家へと歸り去りぬ噫金滿中佐の死際の神聖なる遺言も是よて全く水の泡となれり今井兼女が露國より遙々と汗を懷中にして歸りぬ梅が更に受嗣ぎて男姿にありて巴里に入り角三槇四郎友介が鏢を剛りて爭ひたる其骨折皆烟となりて消了りぬ噫惜しみても猶餘りあり無情ある門苫取の岡の土何故に斯くも幾人に仇するや

## ●第六十二回

遺言書を持ちしまゝ門苫取の岳の下に埋られたる彼のお梅は穴の天井頽し爲め槇四郎角三其他の人々と共に猶ほ深く埋められ今は到底掘出さるゝと叶はぬ身とはなりぬ去れば銀行頭取上田榮三も之を天の裁判を斷念て歸り去りしも涙ある者誰か之が爲めに泣かざるべき此翌日午後三時頃の事なるが榮三は唯獨り己が居間と定めある銀行の事務室に座し腕拱きて思案に沈めり其顏色を見る時は殆ど別人かと疑はる閃閃として人を射たる眼の光も今は全くに曇り果て頰に現れたる活潑なる血の色も何時の間に褪めたりけん宛も土の色を帶ぶ昔の人は苦勞の爲め一夜にして頭髮全く白毛となりしと聞けど榮三は夫にも增し一夜の中に十年ほど更けて見えたり夫も無理ならず今までは如何にもして銀行を盛返さんと其心張詰めしも昨夜の一條よりして其望み全く絶え此上は唯だ破産を待つのみの不仕合せとは爲れり無理の上に無理を重ねて茲までは漕ぎ來りしも今月と云ふ今月は越すに越されぬ關所あり明日を限りに店の戸を閉ぢねばならず己れ一身は乞食するも苦からねど荒き風にも當ずして永の年月育て上げたる彌涙雙を如何にすべき昨夜家に歸りてより唯だ戚が事をのみ

考へ明し今も僅ほ獄が事を案じ暮せり斯る苦勞も我身のおせる罪の報ひと思へば恨もせず咎めもせず從容として天の裁判に任すのみおれど去れば
とて清淨ある娘にまで我が爲めよ苦勞を掛く親の身として忍ばるべきや打案じ打嘆きたる末漸くにして此後の行く道を定め六り灰一握殘らぬまで我身代を振ひ盡して悉く債主の手に渡し其後にて友人町川友介より少しばかりの旅費を借り米國に引移らん人既に五十と云へる坂を過て再び身代を起すは最難けれど米國は其國も新にして仕事も多き所おれば骨身を碎きて稼ぐに於て孃一人を安樂に暮させる事の叶はぬ筈なし夫に就ても氣になるは柳條健兒が事おれど彼れ既に秘密黨の一員たる長谷川の自首に依り其筋より秘密黨と見做るゝ時は我が力にて救ふ事の叶ふべくも非ず夫に引替へ唯だ決鬪の罪のみならば遠からず放免され其放免若し今月の中にあらば共々に米國へ渡るとし左もあくば委細を町川に願み置き我後を追來る事とするも好し夫等は彼れの隨意に任さんと榮三が心は百端に走り迷ひて取留る由もおし斯る中にも唯だ一つ安心なるは明日



馬平侯爵に返すべき大金なり此金を返し終れば銀行は翌日より營業すべき資本を失へど夫は固より覺悟の前唯だ我が平生より憎しと思ふ貴族の一人に辱しめられぬが切てもの幸ひおりハブル港の同業に返すべき筈の金をば同業には來る廿五日まで其期限を延べ貰ひて會計局に積立あり明日侯爵來るに於ては彼れの生白き顏に其金を叩き附け「平民とて侮る勿れ平民は正直おり我が身代を潰して も借た金は期限を違へず金を以て情のあき女を妻にせんとする如き汚はしき心の貴族とは大違ひおり」と充分に罵しり呉れんと一人呟きて頷首けば顏に最沈みたる笑の浮びぬ斯る折しも入口の戸を突然に推開きて顏ばかり突出し恐る〳〵主人の顏を眺むるは此銀行の會計役おり榮三は磴と睨みて「何だ何用だ」と嚴しく問ふ（會）ハイ拂出しの事で一寸と（榮）ナニ拂出し（會）ハイハブル港の同業へ先刻十三万五千法を拂ひ渡しましたので其事をお知せに早や同業に拂ひたり。と聞て榮三は最青き顏を白くして打驚けり此金は是れぞ是れ明日馬平侯爵の顏に叩き附けんと今しも自ら慰めさる金おるに其心を知ずして同業よ

拂ひしとは何事ぞ榮三は火と怒ると共に我知らず太い奴だ」と叱り聲を發したり會計は何時になき榮三の剛慕に返すべき言葉も知らず榮三は自らが言葉の荒々しさに驚きて忽ち其聲を柔げつ「ハテル港の同業へは廿五日まで待て呉れと手紙を遣たが夫だのに今日受取よ來たとは合點が行かぬ（會）ィヤ先刻其手紙の返事が來て至急の入用ゆゑ待つ事が出來ぬとありました其返事をお目に掛やうと思ひましたが生憎貴方が御不在で夫に拂出を見合せと云ふお差圖もありませんでしさから」と尤もある辨解に榮三會計の過ちあらずして却て己の手落なるに心附き苦き聲にて「好く」と會計を退けたり其後に榮三は自ら失望の聲を制し兼エ、是で最う運の盡だ假令ひ閉店する迄も耻知ずと云はれまひ他人に赤面すまひと思ひ今まで心を苦めたも水の泡だ昨夜門苦取の岳の下で遺言書の取出せぬと悟ッたとき是が天の罰だと思ひ町川にも爾云ッたがアレは未罰ではなく誠の罰は是から此身に降下るのだエ是から」と兩の手を握り詰め齒を食ひ〆て涙に光る兩眼を裂るばかりに見張たる心の中は如何なるべき國王を屠り外人を攘んと誓ひたる秘密黨大首領の一世の苦み思ひ遣るさへ勿々なり良ありて榮三は其目を閉ぢ其手を弛めて後の椅子に揺と身を投しは失望極ッて絶息せしかと疑はる去れど彼れ絶息せしに非ず猶ほ虫の息の通へるあり虫の息にて良久しく我心を推鎮める如くなりしが頓て思案の定りてか「好し」と一言決然たる聲を發し最靜に起上りしも其顏色は全く變り生たる人とは思はれず彼れ實に死を決せしあり自殺する外明日の辱しめを逃るべき道なしと決心せしなりア、自殺ー



## ●第六十三回

上田榮三が最恐しき決心を發せしは唯だ借金を恐れての爲にあらず罪あきお梅を殺せしのみか夫が爲め我婿たるべき柳條健兒に莫大の身代を失はせたる我罪の重きを知り打續く不幸も總て其罪の酬なりと悟りて潔よく天の裁判に服せん爲め茲に自殺の心を出せしなり其心實に哀むべきも其娘瀨涙の境遇も亦甚だ哀れむべきあり瀨涙嬢は唯だ彼の伊藤普を友と

して之に我が嘆きを打明るほか心を遣るべき方もなし今日しも居室の内に閉籠り窓の外に置きたる盆栽を打眺めて深き溜息を發するのみあるに（伊蘇普は其心の中を推し察れど我が馬平侯爵に逢ひ柳條救ひ出しの一條を頼みたる次第を打明なば幾分か孃を慰むるに足るならんと思ひあがら）「孃樣何を其樣にお嘆きあされますと問ふ孃は又深き溜息を吐き良おりて此花は昨年私しの誕生日より柳條さんから呉れたのを盆に移し今も此通り咲て居るのに本人の柳條さんは私しの此次の誕生日まで生て居る事か」と言差して涙よ咽びぬ伊蘇普は我知ず熱心の色を現し「イヱ柳條さんは必ず助ります御安心あさい私しが請合ますから」孃は此言葉の異樣なるを怪みお前は何故其樣な事を云ふと問返す伊蘇普は打明て好きか包みて好きか子供心の思案に餘れば暫がほど孃の顔を打目戍るのみなりしが漸くに思ひ切て「若し悪かッたら謝罪ます貴女に聞てから仕やうかと思ひましたが貴女が餘りお鬱ぎですから默ッて仕ても好らうと思ひァノ――（孃）好らうと思ッて何をしたのだェ（伊）柳條さんが馬車から落た侯爵を助け



たと聞て居ましたから」侯爵との一語に孃は早打驚き「エ馬平侯爵かェ（伊）ハイ侯爵に悔があれば柳條さんを救出て呉れるだらうと思ひ私くしは――（孃）お前は侯爵に逢たのか」伊蘇普は口籠りながらハイ其屋敷へ行きましたが下僕が私しを追出さうとしましたけれど其時侯爵が出て來て何事だと大層信切に聞て呉れました（孃）夫から（伊）夫から牢に居る柳條健兒をお救ひ下されと云ひましたら私しの顔を充分眺めた末三日の中に貴女の所までお返事を持て行くと云ひました（孃）何だとへ私しの所へ（伊）ハイ（孃）私しはアノ人に逢あいよ來ても逢ませんよお前は私しの名をアノ人に云たのかェ伊蘇普は早や打明しを後悔すれど偽を云ふ力もあければ其首を打垂れて悄々と「ハイ貴女からの使だと申升た」孃は聞得て忽ち顔を赤くし「夫はお前好ない事を仕たよアノ侯爵は柳條の戀――と言掛けて口を塞げり（伊）悪かッたら許て下さいデモ侯爵は佶と柳條さんを助けて呉れますよ夫に猶だ貴女位の若い女も矢張り柳條さんを助けて呉れと侯爵の母君へ願ひに來て居ましさから私しは助けて呉れると受合ます」アヽ伊蘇普

は益々禁制の場所に入んとす(孃)あんだとェ若い女が(伊)ハイ立派な着物を着て供を連れ丁度貴女位ですよ(孃)夫が柳條健兒を助て呉れと云たのかへ(伊)ハイ爾する内母君が警視總監に話て遣うと云ひました其女は嬉し相に歸て行きましたが私しの考へでは何でもソレ貴女と一緒に柳條さんを救に居ッたエンファ街のアノ家の娘だらうと思ひますよ矢張りアノ家の下僕が供に就て居ましたから柳條が怪我の爲とて一月ほども留められし彼の家に娘ありとは今聞くが初めてあれど一時は必ず外に女のある爲あらんと疑ひたる事もあり其疑ひが誠となり我身の外に柳條を助けんとて侯爵の家にまで入込み行く熱心の淑女ありとは心憎し孃は口の中にて「では柳條さんが助ッても」と呟きしのみ後は首を垂れて思ひに沈みぬ伊蘇普は孃が心をくみ兼てあたふたとなし居たるが斯る所へ柔かに入口の戸を開きて入來るは孃が父桑三なり其顏色は強て恐しき決心を包さんとする如くあれど猶ほ何となく悲げなり流石に親子の間とて孃は尋常ならぬ想ひをおせし歟一目見て「オヤ阿父さん貴方は何うおさッたのお顏



の色が毎とは(桑)イヤ何でもない」とて伊蘇普が方を一寸と見遣ば彼れ心得て此室を退けり桑三は我が顏色を隱さんとすれど隱すに由おければ突と孃の傍に寄り抱よせて孃が顏を我が胸に推當たり胸の内に打つ波は孃が顏にまで響やすらん桑三は斯くて少しの間に我顏色を作り直し漸くに孃を放して「此程も話た通り色々商業上の手違で大金の入用が出來たから私は古い貸金の殘りを取纏める爲め英國へ立ふと思ふが(孃)オヤ英國へ何時(桑三)は「明の朝」と答へしが我が命明の朝限りかと思へば思はず一滴の涙を落たり孃は心悟く「オヤ貴方は何故泣きます英國へ行くお積ではありますまい」貴方は」とまで後は口に出ず(桑)英國でおくて何所へ行く者か大抵二週間で歸る見込だが商業上の事だから都合に由れば一月掛るかも知れぬ其留守に唯伊蘇普と下僕だけではお前も定て心細からう夫だから能く町川に話込み留守中お前を預ッて貰う事にする」孃は怪と思はぬにあらねど眞逆に我が父の自殺する心ぞとは悟り得ず留守の事は何うでも好う御座いますから貴方お早くお歸りを」と云はれて桑三は最早や我顏を

蹤に合せ得ず其儘、振向きて「ア、店で會計が呼ぶ樣だ」と紛らしたり

## ●第六十四回

桑三は潔白ある男子あり我身の貧苦は忍び得るも身の耻は忍び得ず馬平侯爵に返すべき大金の調ざる、より之を返さずば痛く我身の耻とあるを知り其耻を免れん爲め終に自殺せんと決せしなり彼れ貧苦を恐れてに非ず唯耻を恐れてあり貧苦を恐れて耻を恐れず貧苦の爲めに耻しき行ひをなす世の不潔なる人々と日を同うして語るべきに非ず去れば彼れ商用の爲め英國に行くと云ひて餘所ながら娘に暇乞し夫より我が室より籠り翌朝の四時頃まで幾通かの遺言書を認めたり其中には銀行の始末方を會計に差圖したるもあり瀬涙と柳條が事あどを町川に頼みたるものあり是にて用意は全く整ひたれど銀行の店を開くは毎日午前九時よりして夫までには猶ほ四五時間の猶豫あり此間に切て巴里の見納より近邊を散歩せんと窃に我家を忍び出徐々と近廻りの町々を散歩せり固より朝四時頃の事なれば就



れの町も往來に人絶えて靜なると云ふばかりおし歩みながら我身の今までの事を考へ見れば宛も長き夢の如し思ふて身後の事に到れば一として涙の種あらぬはあけれど泣くも今更詮なき事なり死顔に涙の痕を留むるは男の耻とする所快よく打笑みて泰然死に就きたる事を知せるに如ずと強て自ら面を柔ぐ其苦みは如何ばかりぞ斯くするうちに六時を過ぎ往來ふ人の稍や繁くなりたれば最早や散歩も是までなりと又も我家へ忍び歸りて再び我が居間に入れり壁には一昨夜町川友介と共に腰に着けて門苦取に行きたる彼の二挺の短銃あり是ぞ我が命を托する道具と思ひ靜かに取來りて檢むるに雨中を冒して運びし爲めか火藥筒口皆濕りて物の役に立ち難し更に長劒に伏して自殺せんと思ひしが此時フと心に浮ぶは兼て歩が卓子の抽斗しに仕舞ひある二挺の短銃あり此二挺は哀むべき彼のお梅が持たる者なり老白狐と間違へてお梅を穴の中に連れ來りし時捕手の者が大首領に渡せしを其儘持歸りて卓子の中に納め其後銀行の到底成行ざるを悟りし頃初めて自殺の念を起し取出して檢め居たるに其時彼の柳

條健兒が瀬浪嬢との婚禮を乞ひに來りしより再び卓子に納めし儘あり我れお梅を殺せし代りにお梅の短銃を以て我身を殺す亦罪亡ぼしの一端ならん斯く思ひて卓子を開くに二挺とも猶ほ其時の儘に在り一挺は女持にて小形あれば我が短銃の丸之に合はず殘る男持の一挺あそと取上て其引鐵を試し見るに猶ほ鎖もせず舉卸し甚だ爽かあり是なりと頷首きて更に我丸を取り之に合すに一厘一毛の違ひもなし彼の時此短銃を持歸りしは今日之にて自殺する前兆ありしかと最沈みたる笑を浮めぬ此上用意する事もあしイザ死んと安倚臺に身を置きつ兩目を閉ぢて短銃を咽に當しが今は家内の者も悉く起出たる時分あれば一發に死せざれば死後れる事ともならん永く用ひざる短銃の萬一就れかに具合の悪き所ありて火の移らざる事もあらば徒らに死耻を酒すに至らんと臨終の際にも猶ほ心の届かぬ所なし更に又眼を開きて筒の穴を覗き見るに怪や其中は細く卷たる紙切を詰込あり(ソレ見たか此儘遣れば死損ふ所であつた)と打呟き先づ此穴を掃除せずばと掃除の道具を取りて穴の中を浚はんとす(フム)お梅は短銃



の手入あど充分に知らぬから紙を詰ねば鎖るとでも思ッたのかと其紙切を引出すにア、是れ尋常の紙切あらず棒の如くに卷詰めたる者にして何かの書附らしく見ゆるにぞ榮三は丁寧に之を伸し初めぬ長く卷たる儘あれば伸すに從ひ又跳返りて自ら卷上がれど中に書きたる荒々しき文字其度に散々と見ゆるにぞ榮三は難船の乘客が遙に水平線の邊に救ひ船を見る心地し兩手に取りて其紙を卓子の上に披き文鎭を載せて之を讀むに是ぞ今まで尋ねに尋ねたる古澤中佐の遺言書なり其文

余は手傷を負ひ今將に露國の病院にて死せんとすれど幸ひ心猶ほ確なる故茲に遺言書を認めて余が財産の處分法を定む余が財産は公證人の公證にて明かなる如く今現に公證人の管理に在り總額二百四十万法なり余は此總額を余の妻の甥に當る柳條健兒に讓る者なり但し此遺言書は今現に余を看病せる今井兼女に托する故兼女より柳條に渡すべし柳條は此財産の中ゟ年々兼女に五千法を給すべし

とあり書式も總て方に叶へり是にて見ればお梅は大事の上にも大事を取

り遺言書を短銃の穴の中に納め置きたるなりお梅は岡の下に埋まりしも遺言書だけは榮三の手にて助かり居たるなり斯と知ずして今まで捜したる愚さよ去れど榮三は之が爲め自殺の決心を翻へさず「アヽ今まで柳條に非常の損失を掛たと思ひ夫ばかり氣に掛ッたが之で其損失だけは助かッた柳條も充分の財産が出來れば瀬涙と共に幸福に此世を送れる己も先づ安心して自殺が出來る」と初めて眞に嬉しげなる笑顔をあせり是より此遺言書を町川友介に托し置かんと先に町川に宛認めたる書置の封を開き之に一行り書認めて其中に封じ込み「サア之で用事は濟だ」と再び自殺の覺悟に掛り安倚臺に寄り掛れば此時壁に懸たる時計は早や九時を報ぜり九時は銀行の營業時間あれば俄に四邊も騒々しく聞ゆる故「早くせねば仕損じる」と云ひつゝ短銃を咽に當て今や引鐵を落さんとするに折しも輕く入口の戸を叩く者あり是れ定めし娘瀬涙なるべしと思へば榮三は折惡し瀬涙に死る所を見するは好ましからずと何氣なく立上て内より其戸をソッと開れば個は如何に瀬涙にあらで馬平侯爵なり



## 第六十六回

瀬涙なと思て戸を開きしに意外にも馬平侯爵なりしかば扨は今日あろ大金返濟の期限あるより銀行の開くる時間を待ち兼て早や催促に來りしかと榮三は且驚き且怒れり去れど侯爵は催促に來しにあらで實は先の日伊蘇普に向ひて約束せし如く瀬涙孃への返事を持來りしなり痛く貴族を忌嫌ふ榮三の目より見れば馬平侯爵は最憎むべき人の如く思はるれど當時交際社會に飛鳥を落すほど持囃さる人なれば滿更人情を知ぬに非ず先の日伊蘇普の口よりして瀬涙孃が柳條を助け呉れと願ふ旨を聞きてより痛く失望し瀬涙は到底我が物に非ずして柳條の物なりと思ひ妬さ悔しさの念殆ど止み難かりしかど妬ましとて其妬ましさを現して執念く仇するは紳士の作法に非ず男らしく思ひ切りて我が心の潔きを示し我敵にも恩を施す君子の所爲を現すは我が敗北を償ふの好手段なりと流石に天晴なる決心を發せしかば直に柳條を救ふべき手管を運び飽までも我胸中の寛大

なるを示さんとて今茲に入來りしあり榮三は斯くと知らねば怒る心を制し兼て口に發し分りました早々と催促に入しッて宜しい御安心あさいまし貴方の推量する通り此榮三は返すべき大金の一部を使ひ込み今茲で耳を揃へて返す事も出來なくあり貴方に對して頭を下げねばならぬ人となりました頭は下げても我が娘ば娘です賣物でありません」と留度もなく馬らんとす侯爵は禮云はれんとこそ思へ馬らるゝとは意外あれば暫し呆れて榮三の顏を見詰るのみなりしが漸く其意を悟りてか「イヤ上田氏貴方は重る心配に迫上て其樣な事を云ふのです私しは催促に來たではあく其證據は既に此錄行の預り證書を燒捨たので分りませう(榮)若し燒捨たなら恩を以て此榮三を搦む爲です其傳には乘りません預り證書を燒捨ても商人は手許に在る帳面に對して義務を負ひます帳面の文字が消えぬ中は貴方は私しの債主です證書を燒ても何の恩にもありませんとて益々荒出さんとする所へ侯爵の後を潛り又も現れ來る一人の男あり榮三は其顏を見て打驚き、ヤ、柳條君かお前が何して(柳)馬平侯爵の骨折で無罪の身とな



ン牢屋から出されました(榮)何だと此馬平侯爵の(柳)ハイ此馬平侯爵ですす侯爵は吾々の恩人です貴方は最う侯爵に對する敵意をお捨あさい」榮三は頑固なれど義理恩愛を解せざる人に非ず秘密黨たるの嫌疑を受しからは到底助るべき見込あしと思ひたる柳條が侯爵の爲めに助けられしとありては如何でか其恩を謝するに猶豫せん直に侯爵の差延る手先を握りたり生れて五十餘年間貴族の手を握りたるは今が實に初てあり侯爵は最滿足の体にて「イヤ私しの心が貴方に通じたのは何よりの幸ですお二人とも色々お話もありませうから私しは是にて」と早速切上て分れを告げ後をも見ずに歸り去りしは長居して體云はるゝが氣の毒ありとの紳士の掛引ところ云ふべけれ茲に到りて榮三も殆ど自殺の決心を打忘れ「先づ聞給へ柳條お前は佛國第一等の金滿家にあつて居るぜ」とてお梅の持し短銃の筒よりして不思議にも遺言書の出たる由を語るに柳條は榮三が再び自殺せんと搆しを察し慈くやら歡ぶやら其有樣は唯だ讀む人の推量に任すのみァ、茲に至りて唯一人哀むべきは烈女お梅なり此記事をして若し小説から

しめば悪人亡びて善人榮ゆるの規則に從ひお梅は不思議にも助りて此所へ柳條を尋ね來る所なるべきも眞實の話は小說ほど都合よく行き難しお梅は全く活埋にせられ既に門苫取の岳の土となり終りたれば其遺身は唯だ二挺の短銃あるのみお梅の如く不幸ある者は又とあるまじ譯者も思ふて其身の上に到る毎に潸然として血涙の下らずんばあらず去れど後に到りて柳條健兒は上田榮三町川友介等と共に碑を立て此烈女を祭りしと云へば亡魂既に天國に上りしあらん

斯くて榮三も自殺の心を翻へせば其組合人柳條が金滿中佐の相續人となりし事其頃の噂とあり今まで融通の就ざりし上田銀行も忽ち非常の信用を得九月の末に閉店と決したる其衰運を挽廻し一二を爭ふ有福の銀行となり上田及柳條銀行と看板を書替たり此餘の事は讀者の推量にて分るならんが念の爲めに摘みて記さば柳條は町川友介を再びペッゴーへ遣はしお兼を牢より救ひ出さんとせしに兼女は元々罪ある者にあらねば直に其目的を達し町川に連られて巴里に上り柳條と瀬涙との婚禮の席にも列り



引續きて金滿紳士柳條家の老女となりぬ健兒瀬涙の夫婦は最幸福に世を送りしが幸福の人には奇談あし奇談なければ此上に記すべき事もあし乞食の兒伊蘇普は後町川が家の支配人となり終に其店の後嗣となりぬ栗山角三が娘澤子は如何にせしぞ父の行方知れずありしも柳條を我手より失ひしほどには驚かず柳條が瀬涙との所天となりしと聞き最痛く失望し世を果あみて尼となりしか否々女俳優とはなりぬ

活　地　獄　終

# 活地獄

版權登錄

明治廿三年十二月二十日印刷
明治廿三年十二月廿二日出版

版權所有

淚香先生譯述

出版發行者

一五本岩者纂編
東京京橋區元數寄屋町一丁目三番地

七宗田町者刷印兼ノ發
東京日本橋區新右衛門町十番地

大日本帝國郵便
四銭
1
2
4

100806-000-4

特13-522

活地獄

黒岩　涙香／訳

M23

DBY-0048